



小美玉市 まるごと 文化ホール 計画

2012-2021

根を張ってこそ花が咲く
～小美玉文化はポジティブ・フィードバック(前向き思考)～

小川文化センター(アピオス)
四季文化館(みの〜れ)
生涯学習センター(コスモス)

文
の
まち

小川文化センター(アピオス)

ミッション:共に支え合う自由空間

誕生年月日:昭和57年(1982年)11月1日

大ホール:1,194席 小ホール:約300席(可動席)

主な自主事業(H23):スター☆なりきり歌謡ショー
アピオス小劇場シリーズ、おやじバンドコンテスト
鑑賞事業(買い取り)、アピオスばるず(公演ボランティア71名)
陽だまり横丁(年12企画)、遊歩道(幼稚園保育園展:年6企画)

〒311-3423 小美玉市小川225番地
TEL 0299-58-0921 FAX 0299-58-0923
Email apios@city.omitama.ibaraki.jp
URL <http://apios.city.omitama.lg.jp>

四季文化館(みの〜れ)

ミッション:つどう・つなぐ・つくる

誕生年:平成14年(2002年)11月3日

森のホール:600席 風のホール:約300席(可動席)

主な自主事業(H23):みの〜れ住民劇団・住民楽団公演
みの〜れ芸術展、光と風のステージCue(年6公演)
マタニティコンサート、陽だまり横丁(年12企画)、劇団四季公演
ときめき美の小径(年8企画)、なつかしの名画座(年6作上映)
みの〜れデベロップスクール(リーダー塾)
みの〜れ支援隊(7組織186名)
各種実行委員会プロジェクトチーム(8組織152名)

〒319-0132 小美玉市部室1069
TEL 0299-48-4466 FAX 0299-48-4467
Email minole@city.omitama.ibaraki.jp
URL <http://minole.city.omitama.lg.jp>

生涯学習センター(コスモス)

ミッション:生涯学習の拠点

誕生年月日:平成6年(1994年)7月26日

ホール:535席

主な自主事業(H23):おみたま和太鼓フェスティバル
笛の音楽隊ピッコロ、鑑賞事業、夏休み親子体験講座(和太鼓)
文化講演会、子どもの体験講座(演劇)、演劇Crew Cosmo's
コスモスサークル交流会
C.C.C.(こすもす・きゃんぱす・こんさあ〜と)
コスモスカフェ「Win-Win」(母親対象デベロップスクール)

〒311-3433 小美玉市高崎291-3
TEL 0299-26-9111 FAX 0299-26-9261
Email cosmos@city.omitama.ibaraki.jp
URL <http://cosmos.city.omitama.lg.jp>

小美玉市 まるごと 文化ホール 計画 2012-2021

根を張ってこそ花が咲く
～小美玉文化はポジティブ・フィードバック～

●目次

- 03 ビジョン 根を張ってこそ花が咲く
- 05 まえがき 東日本大震災の中で
- 09 序章 「人」が鍵
- 13 第1章 極める - 住民参画のクオリティ -
- 17 第2章 つなげる - バトンタッチ -
- 23 第3章 広げる - 文化のネットワーク -
- 27 あとがき 未来予想図
- 小美玉の新たな文化づくり物語 -

文化のまち





根を張ってこそ花が咲く

小美玉市文化ホール
ポイジードバック・は

小美玉市の文化ホール3館を拠点に、まち全体の元気をどんなふうにつくっていくか。そして10年後へ向けていかに伸ばしていくか。それを考えたのが「小美玉市まるごと文化ホール計画」です。

3館は現在、住民と行政が互いに知恵を絞り、汗を流しながら、館の元気づくりを行なっています。それが関わっている人たちの誇りにもつながっており、理想的なまちづくりのスタイルになっています。新たな文化づくりの物語を描いていくこの計画は、そんな3館で活躍する住民リーダー12名と館職員7名がプロジェクトチームを組んで、3館揃ってつくる、初めての取り組みなのです。

まずはじめに、3館がそれぞれの個性・独自性を互いに認め合い、刺激し合う存在になることを大事にする、ということを計画の根底にしました。そして、これまでのまちづくりは問題発見・問題解決でしたが、これからは良いところを磨きこんで伸ばしていく『ポジティブ・フィードバック(※)』の精神

が大切だということ掲げ、小美玉3館の良いところ(強み)は何なのか、2年間の活動の中で探し続けることにしました。

2年間の活動を通じて辿り着いたビジョン「根を張ってこそ花が咲く」。切り花はすぐ枯れてしまうのと同様に、出来合いの作品を持つてくだけの文化活動はすぐ枯れてしまいます。都市ならば頻繁に生け換えるのでいいかもしれませんが、地域は毎年美しい花を咲かせる木々に囲まれていたい。人の根を張れば、まちの幹が伸び、文化の花が咲く、そんな文化活動にしていきたいことが「持続可能な豊かな文化のまち」の実現につながると考えています。

※ポジティブ・フィードバック
褒めあつたり評価しあつたりして相互に元気を分け合い、自分を高めようとする感性的方法。良いところを磨きこんで伸ばしていく。
対義語→ネガティブ・フィードバック
「問題発見(悪口や不満の言い合い) ↓問題解決(解決行動)」の理性的方法。



策定プロジェクト外2年目の初回は7月7日七夕の日。県央地域一斉ライトアップと重なったため、みの〜れ風の広場で星を見ながら文化談義。忘れられない1日となりました。



蓮見 孝

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクト コーディネーター

1948年神奈川県鎌倉市生まれ。64才。1971年東京教育大学教育学部芸術学科工芸・工業デザイン専攻を卒業。20年間にわたり日産自動車株式会社勤務し、第1モデル課長、エクステリアデザインスタジオ代表チーフデザイナー等を歴任。プレセア、ラルゴなど多くの車種の開発に携わる。1976年に大学院大学であるロイヤルカレッジ・オブ・アート(ロンドン)に社命留学。1991年に筑波大学に専任講師として転籍し、2000年から教授(大学院人間総合科学研究科芸術専攻)。芸術専門学群副学群長、大学本部の広報戦略室長、学長補佐などを歴任。茨城県総合計画審議委員会副会長、茨城県生涯学習審議会・社会教育委員会会長、国交省観光まちづくり事業(常陸太田地区)座長・コーディネーターなど、茨城県および県内の市町村を中心に、さまざまな地域振興プロジェクトにかかわっている。また日本デザイン学会理事・副会長、(独)大学評価・学位授与機構・大学機関別認証評価委員会専門委員・学位審査会専門委員、グッドデザイン賞審査委員、JR東海デザイン委員、(財)日本サイクリング協会評議員など、多角的な活動をおこなっている。2012年4月より札幌市立大学理事長・学長に就任。「地域再生プロデュースー参画型デザインングの実践と効果」「ポスト「熱い社会」をめざすユニバーサルデザインーモノ・コト・まちづくり」、「マルゲリータ女王のピッツァーかたちの発想論」など著書多数。

人を何よりも大切にする文化

長くて覚えにくいのですが、この事業は、「小美玉市まるごと文化ホール計画策定プロジェクト」といいます。平成22年11月18日の第1回から今年の9月8日までの2年間にわたり、市内3館のホールを支えてきた住民リーダー12名と職員7名が参加して、活発な議論や研修が、夜な夜な熱心に繰り広げられました。

そもそも“まるごと文化ホール計画”とは何なのでしょう。インターネットで検索してみると、“市内にある3つの公共ホールが、文化の創造・育成を図る地域住民の拠点として機能し、それぞれの特性を活かしつつ連携するための指針となる全体計画の草案をつくる”と記されています。

わたしは、そのアドバイザーとして参加することになったのですが、いずれのメンバーも文化の担い手として活発かつ着実に文化活動を推進されてきた方々でしたので、“わからんチン”は一人もいず、ゴールめざして最良のチームワークでサクサクと指標づくりに邁進することができ、とても印象的なプロジェクトとなりました。メンバーのみなさん、そして名仕切り役の中本正樹さん、本当にありがとうございます。

結果として、文化の本質に迫る有意義な成果が得られたと思います。文化とは、あらゆる人をその人らしく生きさせてくれる表現の泉であり、幸せの源泉なのです。だからこそ、文化は人を何よりも大切にします。文化ホールは、人を育て、人に生きがいを与えてくれます。ホールで生きがいを育てた人は、やがてまちの隅々に魅力的な文化活動の花を咲かせ、それが町中に広がって、市内がまるごと文化ホールになっていくことでしょう。いくら立派なホールがあっても、切り花のような興業活動に頼るだけでは、すぐに文化の花はやせ細ってしまうはず。「住民参画」という根のある活動が引き継がれていくからこそ、文化の木は大きく枝葉を広げ、ますます見事な花を咲かせるのです。「根を張ってこそ花が咲く」という山口茂徳館長の名言を忘れないようにしたいものです。

今回のプロジェクトには、さまざまな方々にゲストとして来ていただき、意義ある情報交換や議論をすることができました。喜多方プラザ元館長の薄崇雄さん、TAP事務局長の羽原康恵さん、茨城県生活文化課の武田順さん、市空港対策課の高田勝利さん、東京芸大音楽学部教授の熊倉純子さん、群馬交響楽団の五十嵐靖夫さん、栗田弘之さんです。みなさんの活動の様子や文化に寄せる思い、アドバイスを通して、小美玉市の文化ホールのあり方を多様な角度から比較して見ることができ、より客観的に自分たちのあるべき姿をとらえることができたと思います。遠路を厭わずやってきてくれた文化の友に、心から感謝いたします。

「桃杏不言 下自成蹊」という司馬遷の名言があります。桃やアンズは何も言わないけれど、その美しさに惹かれて人びとが訪れ、その木の下には自然に道ができる、という意味です。今回のプロジェクトを通して、メンバーのみなさんが、しっかりと根を張った桃やアンズの木に見えてきました。まるごと文化ホールは、きっとこれからも多くの文化の友だちを惹き寄せ、文化の道を大きく広げていくことでしょう。



まるごと文化ホール計画のツリー構造

ビジョン

根を張ってこそ花が咲く

～小美玉文化はポジティブ・フィードバック～

戦略

極める

～住民参画のクオリティ～

つなげる

～バトンタッチ～

広げる

～文化のネットワーク～

手法

参加のしやすさ

住民主役行政支援

次世代へつなげる

館職員の育成

アウトリーチ

横の連携

まえがき

東日本大震災の中で

この計画づくりの最中に起きた東日本大震災。文化ホールの存在意義を強く考えさせられた出来事でした。

平成23年3月11日、午後2時46分。マグニチュード9.0の大地震、津波、原発事故が一日のうちに起こった未曾有の危機。小美玉の文化ホール3館は、震災後すぐに住民の避難所や災害対策本部となりました。

そんな中、天井が落ちたホールを見にやってくる我が子のように心を痛めて一日も早い傷の回復を心待ちにしている人、震災の影響で一度は中止になった参加型事業の振替公演を希望の光にしていると涙ながらに語る人、仲間たちにメールで連絡を取り合い励ましあう人など、文化ホールの活動がライフスタイルと一体化し、強く生き抜こうとする姿を目にしました。

1. ココロ・オープン・サポート

そんな中、いち早く動き出したのが、みの〜れ住民劇団「演劇ファミリーMyu」でした。自らの存在を社会的機関として認識する彼らは、阪神淡路大震災の折に演劇の手法を用いて被災者の心のケアを行なっていた演劇人たちの活動を学んでおり、演劇の持つ効用を認識して常日頃から活動にその手法を取り入れ、技術を磨いていました。

自ら持ち得る技術と経験を全う地域に役に立てるため、地域の小学生たちの心のケアを目的とした演劇ワークショップ「はっぴい☆ぷるじえくと〜ココロ・オープン・サポート〜」を企画。地元アーティストも賛同し、絵本とジャズピアノのコラボレーション作品も取り入れた独自の企画を瞬く間に創り上げて実践しました。地域に根ざす文化ホール「みの〜れ」専属の住民劇団として、オリジナル作品を創り続けてきたことで磨かれた人材と経験があつてこそ為せる技でした。



みの〜れ住民劇団「演劇ファミリーMyu(みゆう)」が開催した「はっぴい☆ぷるじえくと〜ココロ・オープン・サポート〜」は、
①演劇的手法のワークショップ②ミュージカルワークショップ
③ジャズピアノと絵本の朗読のコラボ作品の3本立て企画。
地域の小学生を対象に行われた。



コスモスやしみじみの家、民家園まで含めたエリア一帯をフィールドに活性化を図るコスモスプロジェクトが企画するC.C.C(にすもす・きんぱす・こんさあ〜ど)。

2. 資源をつなげる

同じ頃、コスモスプロジェクトも動いていました。前述のMYUに属するミュージシャン2名を招聘してローコンサートを企画。関係者はコンサートの開催のみならず、人々の交流と新たな価値を生み出すことに着眼。出演者でみのもたけとつながり、ローコンサービスでNPOしみじみの村とつながり、終了後は隣接するしみじみの家で宿泊前提の打ち上げを行うことで、コスモスが有する資源を「つなげ」、住民主体の活動による「人の心の温もり」が感じられるような企画を生み出しました。

3. ピンチはチャンス

アピオスでは、「アピオス小劇場タンゴコンサート」が、大ホールが地震の影響を受け使用できなくなっていたことで開催が危ぶまれていました。しかし関係者は、飲食できる小ホールに場所を移し、団子を食べながらタンゴを聴くという「タンゴでタンゴ」なる企画にバージョンアップさせました。暗い世相をもろともせず、洒落でピンチをチャンスに変えるたくましさや柔軟な発想力が発揮されたケースでした。

文化がまちを元気にする

小美玉市には、小川文化センター(アピオス)、四季文化館(みの〜れ)、生涯学習センター(コスモス)の3館の公共ホールがあります。人口が約53,000人の小美玉市に公共ホールが3館あるという文化的に恵まれた環境です。合併以前の3町村がそれぞれに公共ホールを所持していたことによるものですが、3町村の住民がそれぞれに文化意識の高い人たちであったためであると思われます。この恵まれた財産を有効に活用して「まちじゅうに文化があふれる」ようにしたい、そして「文化のまち小美玉市のイメージが全国に知られる」ようにしたいと考えます。

第二次世界大戦後の日本は、産業経済が急速に成長しました。「心のやすらぎ」を忘れて「物の豊かさ」を求めて邁進しました。それなりに「まちが元気」になりましたが、「真の元気」ではなかったように思われます。文化に親しむことによって私達の「心にやすらぎ」が生まれます。また、世代を超えたつながりも生まれます。そして「創造力が豊か」になって産業経済が活性化し「まちが元気」になっていきます。「物の豊かさ」と「心のやすらぎ」の両方がある、初めて真に「まちが元気」になるのではないのでしょうか。

四季文化館(みの〜れ)で始まった「住民参加・参画、行政支援による公共ホールの運営」が、またたく間に小川文化センター(アピオス)にも生涯学習センター(コスモス)にも根付き、活発に活動を続けています。文化の力を使って「まちを元気」にするためには、この活動をさらに活性化することが必要であり、この活動が世代を超えて継続できる仕組みづくりを行うことが必要であると考えます。3館の個性を活かしながら、ある時は融合し、またある時は競い合い、3館を文化発信の拠点として活用して「文化のまち小美玉市」を構築していくためには、どうしたら良いか？ 3館で活躍する住民リーダー12名に、コーディネータとして筑波大学大学院教授の蓮見孝先生をお迎えし「小美玉市まるごと文化ホール計画」を纏めました。

この計画を使い込み、住民一人ひとりが芸術を愛し、みんなで文化を育てる気持ちが世代を超えて若者へと受け継がれていくことを望みます。



黒田 惇彦

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム リーダー

小美玉市羽鳥在住。
みの〜れでは“光と風のステージCue”住民プロデューサー、アピオスは愛称選考委員会委員として名付け親の一人、コスモスはクラシックギターのサークル“ギターフレンズ”のメンバーとして定期利用するなど、小美玉市文化ホール3館を愛する地域人。
小美玉市公共ホール運営委員会委員長。
四季文化館企画実行委員会副委員長。

文化が無いとなぜダメなのか

理性と感性

「文化がないとなぜダメなのか」という問いが投げかけられることがあります。「人間らしく生きていくために本質的に求めるものが文化だ」ということは言い続けてきましたが、もともと多くの人に「なるほど!」と思ってもらえるよう、私たちの言葉を紡ぎだそうと「まるごと文化ホール計画策定プロ

ジェクト」を通じて勉強してきました。その中のひとつに、本計画コーディネーターである筑波大学大学院教授蓮見孝先生から教えていただいたことがあります。

「私たちは物事を判断し実践するために理性(ロゴス：真面目な自分)という知恵を活用しているが、その対極に

ある感性(パドス：お茶目な自分)という知力も存在し、一人の人間はこの両輪があつてこそ調和を保ち、共存しつつせめぎあいながら魅力的な個性を創り出している。学校教育を通して理性を高める訓練をしてきているが、感性を高める社会的機能は、残念ながら今の社会にはない。これを活発に高めていき、社会の調和を図ることが、文化ホールが果たしていく使命なのではないか」。

理性的方法は「問題発見(悪口や不満の言い合い)↓問題解決(解決行動)」というネガティブ・フィードバックの暗い側面を持っています。それに対し、褒めあつたり評価しあつたりして相互に元気を分け合い、自分を高めようとするのが、感性的なポジティブ・フィードバック的マネジメントです。

感性を高める社会的機能である文化ホールが、まちの活性化を担う原動力となる存在なのだということを私たちは学びました。

子育ては親育て、 ホール育ては地域育て

みのくれ・アピオス前芸術監督の能祖将夫さんが常々言われていたことです。

「文化ホールは言わば地域の子ども。実際の子育てと同じように、育てるのに手間と暇と金がかかるし、多くの人の関わりが必要で、苦勞も多いが喜びもまたひとしおだ。地域がそのような子どもを持ち育てていること自体が、地域の、そして地域を形成する個々人の成長と誇りになる。子どもを育てることは親を育てることだと言うように、文化ホールを育てながら親である住民一人ひとりが育てていく。そういう機能が地域の文化ホールにはある」。

文化ホールにできるだけ多くの人が知恵を絞り、汗を流せば流すほど、社会もそれだけ成熟していきます。私たちはこれからも絶えずできるだけ多くの「育ての親」を増やす努力を続け、3館を大きくたくましく育てていきたいと思います。それがきつと、地域社会を大きくたくましく育てることにつながっていくでしょうから。



プロの演奏家や、文化ホールを拠点に活動する住民劇団や楽団などが地域へ出向いて積極的に交流を図っているとする「地域アクティビティ」。全120行政区への訪問を計画している。

演奏家：津軽三味線ユニット「あんみ通」



本田仁子

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム サブリーダー

与えられる喜びより与える喜びを

「どうせ私たちには関係ない、一部の人が楽しんでやっ
てるんじゃない…」

とと思っている人を、「文化ホールの活動に参加してみようかしら」と変化させるかが一番の課題だと思えます。

それには地道な声かけが有効ではないかと最近感じています。ボランティアスタッフに参加しませんか？と職場の人に声をかけ、「慣れないもぎりでしたが楽しかったです」との声を聞くと、こちらも嬉しくなります。職場以外での付き合いが出来るときかけでもあります。催し物に参加している喜び、協力して成功させた充実感を共有することが次の声かけにつながるのではないかと思います。お祭りも見ているより参加している方が楽しいですから、企画する方はもっと楽しいでしょう。とにかく文化ホールに足を運んでもらうことです。

足を運んでもらうためには、幅広い年齢層の人に向けた催し物を仕掛けていく事です。幸運にも私どもの保育園児は1歳児からアピオスのステージに立っています。歌ったり、演技をしたり、実に堂々と発表します。自分を見てもらう喜び、スポットライトをあびた興奮を経験しています。父兄も同様です、ステージに立つ自分の子どもにカメラ、ビデオを向け晴れ舞臺に満足しています。文化ホールのステージが近くに感じていることがよく分かります。

小学生、中学生に成長していく子どもたちが、ステージに立ち自分を表現できるチャンス、生演奏のオーケストラのステージを聴く体験、アクティビティの出前授業による邦楽体験。このような本物の芸術に触れる機会を提供すること、すなわち情操教育をするための投資は、未来への希望につながります。これからも惜しまず継続していかなければなりません。

このような豊かな経験をした子どもたちが、成人して次世代の担い手として活躍することが理想です。若いエネルギーを存分に使えるような文化ホールにしていけたら、と日々考えています。練習、発表の場所として使いやすく、若者たちが集う場所づくりのホールにしていけたらよいと考えています。具体的な案は、これからみんなで考えていきたいです。

与えられた喜びより、与える喜びのほうが大きいと感じられますように。

日本が生き残るための戦略

計画策定プロジェクト座談会のゲストにお越しいただいた群馬交響楽団五十嵐常務理事は、『価格競争では海外に全く歯が立たない現在の世の中で日本が生き残っていくためには、時代の変化に対応しつつ新たな価値を次々に生み出していける「創造的な人間」で勝負するしかない。そのためには、今の子どもたちに想像力と創造力をつけさせる戦略として文化芸術が大切だ』と言います。

片山善博さん(元総務大臣・元鳥取県知事)が、全国公立文化施設協会主催の「アートマネジメントセミナー」で次のように講演しています。

『文化芸術、特に芸術は無から非常

に高い価値を創造する営み。現代の経営危機の時代においては、前例やマニュアルが何も無いところからどうやって難局を切り開いたらよいかという考えの力、先を見通した上で新しく成し遂げる力、挑戦する勇氣を持つて新しい考え方を生み出していくことが重要。地域社会全体が文化芸術を重視して、文化芸術に親しんでそこからクリエイティブに挑戦する、勇氣ある社会にしなければならぬ。(中略)知に基づく地域づくりを標榜し、実践しなくてはならないと考えるが、そのためには地域に根ざした生活を守るため、地域に誇りと自信がないといけない。それを生み出すのは文化

芸術でしかあり得ない』
明治維新、戦後復興と並び、社会が大きく急速に変化していると言われる現在。マニュアルや常識が通用しない社会に加えて少子高齢の波。いまの子どものために私たちにできることは、精神的にたくましく賢く育つ環境をいかにつくるかという事。そのための文化芸術であり、社会的機関としての文化ホールなのです。

学び舎

第二次世界大戦後、経済的な豊かさを求め、物にあふれる豊かな社会を構築しました。しかし、「物の豊かさの時代から心の豊かさの時代へ」と言われるように、いま必要とされているのは「人の役に立つ」「人と人をつなぐ」ことで得られる心の充実感です。文化ホールは、住民一人ひとりの心の充実感を達成できる「学び舎」としての機能をもっともっと高めていくことが求められる時代なのではないでしょうか。

「人」が鍵

文化ホール3館を有する小美玉市は、2009年にみのくれが地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞し、アピオス・コスモスにも住民参画による運営が展開されているように、「住民参画による文化のまちづくり」を実践するまちとして全国的に高い評価を受けています。

町村合併効果

みのくれの地域創造大賞受賞のポイントが、審査委員会によって次のように記述されています。

徹底した市民参画によるホール運営を推進。約200名の住民実行委員会が毎年、各種事業計画に携わり、住民劇団・住民楽団を含むボランティア組織の「みのくれ支援隊」約160名が事業を支えるなど、ホール事業を通じたまちづくりの新たな人材育成のあり方を提示した。

町村合併によってみのくれからアピオス・コスモスに広がった、住民参画によるホール運営。ホールの運営や事業推進に数多くの住民が参加・参画し、元気を生み出しています。

特に、他の行政分野で見られない10代〜30代の若者の参加・参画を得ており、3世代が入り混じって創造的な活動を行なっています。ときには企画を生み出し、表現者として舞台に立ち、バックヤードを支え、フロントスタッフとして客を迎え、記者として取材に飛び回り、さらにはホールを飛び出して地域交流を図るなど、文化をまちの隅々まで届けています。館職員はその活動を支え、時には先陣を切って開拓し、新たな住民の参加・参画を促す役目を担っています。

活性化に燃えるアピオス

アピオスは、30年近くに渡って演歌や歌謡曲の歌手を中心に招聘して鑑賞事業を行い、長年「大衆劇場」として役割を果たしてきました。

平成20年度から、活性化のための手法と方針を考える「小川文化センターを活性化する会」(後に小川文化センター活性化委員会へとつながる)を立ち上げ、①愛称募集②オリジナル企画の創造③施設の修復と改善、という3つの活性化の手法と、『共に支え合う自由空間』というミッションを策定しました。

現在は小川文化センター活性化委員会が毎月会議を開き、アピオスの自主事業や運営ルールの改善、全国の事例を参考とした学習や、住民プロデューサーとして必要なスキルを身に付ける研修などを行なっています。

また、国民文化祭演劇祭を支えた住民ボランティアスタッフ中核メンバーと館が連携し、文化ボランティアスタッフ「アピオスばるず」を立ち上げ、住民が支える文化活動の拠点としての体制を整えています。

オリジナル企画にも積極的に取り組んでいます。プロの指導・演出、プロバンドの演奏のもとスターになりきって歌う「スター☆なりきり歌謡ショー」や、大ホール舞台上に仮設客席を設置してこだわりの企画を手作り



公演時にチケットもぎりや座席の案内を行うフロントスタッフボランティア「アピオスばるず」。ばるず(Pais)は、「仲間」という意味。「みんなてアピオスを応援しよう!」という仲間意識をもって、ズレキな笑顔とおもてなしの心を大切に活動している。

で行う「アピオス小劇場」シリーズ、おやじの復権を目指して企画した「おやじバンドコンテスト」を開催し、地域の元気づくりに取り組んでいます。



石川 弥来

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

3館合同で勉強会を続けていこう

今年度の会議では、武田順さん、高田勝則さん、熊倉順子さん、五十嵐靖男さん、栗田弘之さん、の6名のゲストを迎え、それぞれの皆さんの経験豊富な話や熱い想いを聞き感銘を受け、帰りの車の中で、家でメモ書きを読み返しながら知恵熱が出ちやいそうなくらい色々な事を考えました。毎回話しを聞かたびにキーワードが増え、なかなか考えをまとめる事が出来ず非常にややもやした気持ちです。でも、今回の経験を通じ、今までなんとなくぼやっと考えていた小美玉市の将来像を真剣に具体的に考えるきっかけになりました。毎回の会議で自分が感じたキーワードをあげると

- ・単にホールをどう運営するかだけでなく、文化の視点でまちをどう考えていくか
- ・新たな人のつながり、広がりをどう作っていくか
- ・茨城空港や空の駅(構想中)も文化発祥の地と考え、小美玉市は文化ホールが5館ある
- ・文化・芸術は金が掛かるものだが、文化・芸術でお金を稼ぐ事も考えてみる
- ・大切なのはイベントをやることでなく拠点をつくることだ
- ・自分たちだけでやると燃え尽きていくが、外から燃料をもらって燃え続けることが大事なのかも。
- ・もっともっと様々なものをウェルカムしてどんどん多様化していく
- ・ホールという舞台を使って思い出をつくって次の人たちにバトンタッチしていく、「ピオトープ」がいいんだと思っている
- ・時間と空間の共有
- ・もってきた文化は育たない

色々キーワードはありますが、一番つよく思う事は、今回の経験やおもいを限られた人数だけにとどめるのではなく、もっと多くの人と共有しなくてははいけないと思います。

3館の委員、ボランティアスタッフ、そして館を利用している団体の方達、なるべく多くの人と同じ目標「芸術・文化で元気に生きる」を共有し、同じ目標に向かって歩けるよう、まるごと文化ホール計画のこの会議(勉強会)を今年度で終わりにするのではなく、毎年新しく受講生を集め、3館の合同事業として続けていってほしいと強く願います。

全国から注目を集めるみのゝれ

みのゝれは、誕生前の平成8年から住民参画によるホール運営に取り組んで15年。みのゝれが今後どのように成長していくか、アピオス・コスモスにとって一つのモデルになります。

「つどろく・つなく・つくる」をミッションとして掲げ、住民劇団・住民楽団を含む文化ボランティア「みのゝれ支援隊(4部門7組織)」と、事業を企画実行する「各種実行委員会プロジェクトチーム(8組織)」があります。これらの代表や一般公募の住民が参画している「四季文化館企画実行委員会」は、ホールの自主事業の推進や運営ルールの改善について毎月話し合いを持っています。

住民が参加・参画する受け皿は、ミュージカル、器楽、企画プロデュース、広報デザイン、フロントスタッフ、次世代リーダー育成などで、その徹底した住民参画への取り組みは全国的にも先進事例として取り上げられる存在です。

今後は経験やノウハウだけでなく、想いもバトンタッチしながら世代交代と新たな輪の拡大をいかに図っていくか、小美玉3館の将来を左右するモデルケースとして注目を集めています。

周辺環境も

一帯として捉えるコスモス

コスモスは、図書館・史料館・公民館・文化ホールを併設する生涯学習センターとして、各施設と連携して市内全域に生涯学習を発信していく拠点に位置づけられています。

平成20年度に「玉里文化ホールを考える会(後にコスモスプロジェクトへとつながる)」を立ち上げ、①生涯学習の拠点としての特長づくり②住民参画による事業展開③アットホームな身近さ、という提言を行い、文化ホールのみならず、コスモス全体・しみじみの家・民家園まで含む敷地全域をコスモスプロジェクトのフィールドとして捉え、周辺環境も含めて元気づくりに取り組んでいます。

コスモスプロジェクトの具体的な活動としては、フィールド内あちらこちらの場所に企画する「C.C.C(こすもす・きゃんぱす・こんさあーと)」、「コスモスを拠点に活動するサークルを積極的につなぐ「サークル交流会」、若い母親を対象にした学び体験の機会を企画する「コスモスカフェ with wine」、さらに現在はコスモスのロゴデザインを筑波大学と連携して取り組むプロジェクトも進行しており、勢いのある活動展開をしています。

なかながいいセンりんじやん

人をいかに育てるか

小美玉市まるごと文化ホール計画を策定するプロジェクトチームは、3館で活躍する住民リーダー12名。コディネーターに筑波大学大学院教授の蓮見孝先生を迎え、2年の活動期間の中でワークショップを通じて将来像を共有したり、シンポジウムを開催してたくさんの人たちと「文化のまちづくり」について考えたり、「持続可能な仕掛け

づくり」や「文化と商工観光の連携」、「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」について学びました。これらの活動を通じてプロジェクトチームが自己分析した結果は、「小美玉3館、なかながいいセンりんじやん！」。では、この『なかながいいセン』をどうやって持続させられるか、そこが鍵だねという話になりました。

蓮見先生やゲスト講師の皆さんから学んだことや、プロジェクトチームでワークショップを通じて共感しあった想いの共通点は「人」でした。人がまちを元気にし、文化を育み、誇りを生む。この地に住む人たちの郷土愛が深まり、子どもたちがこのまちに住み続け、あるいは魅力を感じた人が移り住む。まちの未来を握る鍵となるのは、いつの時代も「人」なのだということに気づきました。

「結局は人の問題だよね」「ここはいい人材に恵まれてますね。それに比べてうちの市は…」。他の自治体から視察に来られる住民や職員の方々が口を揃えて言う言葉です。ここで言う「人」とは、次世代を担う若者やリーダー、館職員のことを指します。小美玉のいまの魅力は「人」が支えているのです。では、その「人」をいかに育成し、持続可能な文化のまちづくりを実現するか。まるごと文化ホール計画の大きな柱になりました。



【小美玉市まるごと文化ホール計画シンポジウム】
よりたくさんの人たちに「文化をまちづくりにどう活かしていくか」
を考えてもらおうと「文化のまちづくり」を考えて開催。

小美玉市まるごと文化ホールの基本的な考え方

- 1 アピオス・みの〜れ・コスモスを中心核とし、3館の個性・独自性を磨いて伸ばしながら、それぞれ担う部分と連携して行なっていくところを明快にしていきます。
- 2 地域コミュニティセンターや空の駅、商業施設、田んぼの中など、小美玉全体を活動エリアとして捉え、3館から発信していきます。
- 3 祭りや食文化などもまるごと“文化”として捉え、コラボレートしていきます。



植田 康雄

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

郷土に愛着と誇りを

1 自主的なまちづくり活動の推進に向けて

まるごと文化ホールプロジェクトチームに所属し2カ年研修を積んだ。その中で、特に印象的なものは、ワークショップである。参加者が創造的で、生き生きとしたアイデアを生み出していた。グループでの話し合いや作業を通して、自由に意見を出し合うことで、お互いの理解を深め、認め合うことができた。

この経験を生かし、地域における自主的なまちづくり活動のサポートをしたい。

2 文化のまちづくり

私は、生涯学習センター「コスモス」を年間通して利用している。当センターには、文化的遺産、風土を生かしながら、優れた芸術文化を身近で鑑賞できるようにし、地域文化を育てる拠点として、その機能を発揮してもらいたい。そのために、次の点をお願いしたい。

- ①併設されている史料館や図書館の施設の持つ機能を十分発揮させる。
- ②市民が、積極的に参画できる取り組みをさらに工夫する。
- ③子どもたちの文化・芸術活動への積極的参加促進と意識を高揚させる。
- ④文化・芸術活動を通して、地域コミュニティの活性化を図る。
- ⑤「しみじみの家」や「民家園」など、周辺の施設との連携を考慮した工夫を凝らせば、もっと大勢の市民が散策に訪れる。
- ⑥施設・設備の使用率を向上させるために、利用料金等の見直しをする。

そこを訪れると新鮮な情報や発見があったり、心の安らぎを覚えたり、何かを学んだりする施設であってほしい。

3 郷土を愛する

自分の住む町が一番だと、郷土に対して強い愛着心や誇りをもてる人々を一人でも増やすことが重要である。老後も住み続けたいと願う町とは、どのようなものか。それは、生活するのに便利なおえ、治安も良く、仲の良い近所付き合いや人情のぬくもりが感じられる場所、すなわち「安全・安心」な場所だと思う。

「文化」だけの視点で町づくりを見るのではなく、「安全」「観光」「福祉」「教育」などの施策と連動させながら進めることをお願いしたい。郷土に執着心を持ち、何十年も先を見て取り組めば、より独創的なビジョンも生まれてくると思う。高くスローガンを掲げ、姿勢を見せることで市民の意識に変化が生まれるはずだ。



内田 保

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

特効薬はない。動いていくことだ。

まるごと文化ホールプロジェクトチームの目的は、小美玉市にある3館をこれから将来にわたって、負の遺産にならないようにどのように使っていくかと、当初私は思っていました。しかし、何回もの会議(研修?)や委員のみなさんの意見を伺っているうちに、これは少し考え違いをしていたと思いました。本当は、この小美玉を文化の街にするために、当市にある三つの文化ホールは何ができるのか、だったんだと気づいたんです。プロジェクトチームでは、様々な事例や委員のみなさんの意見等を聞き、それぞれの素晴らしい考え方に一々納得しました。でも、そのためにはこうするんだ、という特効薬はなかなかありません。たくさんの意見や考え方が出ましたので、それに基づいて常に何かしら行なっていく、停滞しないように動いていく、ということが重要かと思っています。

さてここで、私個人的な考えを一つだけ書きます。シンポジウムの時に、市長が言った「文化は芸術文化だけでなく、食文化や農文化などもある」という言葉が、やけに心に残っているんです。文化ホールで、異文化交流のような催しができる面白いかもしれませぬ。



コスモスを拠点に活動している「演劇Crew Cosmo's」

極めるー住民参画のクオリティー



3館には、表現者、それを支えるスタッフ、企画者、さらには演劇、音楽、美術、映画などありとあらゆるジャンルへの参加参画の受け皿が用意されており、それぞれ活発な活動が展開されています。この長所をさらに活かすには、「参加のしやすさ」と「習熟した住民との活動提携」のクオリティを上げることがです。これは「住民参加（行政主導）→住民参画（協働）→住民主役（行政支援）」という活動の成熟過程に伴う参加参画のグラウンドデザインを見直し、これまでやってきたことにひと工夫加えることで、新たに参加する人が参加しやすい環境を充実させることとなります。

また、自主的に活動できる住民（個人および団体）がホールと提携してまちのためにどんどん自主的な活動を繰り広げていき、必要な支援をホール側が行なっていくような環境をつくることとなります。

1. 参加のしやすさ

これから活動に参加しようと思っている住民にとって、すでに活動している組織に入り、経験のある住民スタッフといきなり一緒に活動しようとするのは敷居が高いでしょう。

そこで、自分の興味や適性を感じた上でそれぞれの組織に入っていくことができるようにするため、短い期間の中で様々な活動が体験できるワークショップをつくっていきまます。これまで表現者の参加拡大の仕掛けを作ってきましたので、これからは企画、舞台技術、フロントスタッフなど、文化ホールの運営を支える側のためのワークショップをつくっていくことが大切です。

モチベーションを保つには、例えば椅子並べを行うボランティアにしても、ディスプレイして並べてみてチェックする、というように、社会的責任と達成感を得られるように、きめ細かいマネジメントが大切です。たくさん種類を増やして体系化していくことで参加の輪を拡大するためのツールが広がります。

学校のように

同じ時期に入学し同じ時期に卒業する、学校のように常に同じようなサイクルで入れ替わるという仕組みをあえて作ることで新たな参加者が参加しやすくなり、卒業生が既存の組織に毎年加入していくようになる、組織には常に新しい風が入る仕組みが整います。この仕組みを表現者育成のためだけではなくスタッフ養成にも応用していくことで、実行委員会やボランティア組織の新陳代謝を促すことにもつながります。

ここで大切なことは、初めての人が参加しやすい環境を整え、それが館の受け皿である組織につながり、その組織自体もこの関係を望んでいることです。新たな人の参加、輪の拡大は、組織や館の活性化には欠かせません。

企画、広報、裏方、表方運営、アウトリーチにまで住民が参加・参画しているのが小美玉の文化の特長です。すでに実践活動している事業や組織に入る前のワークショップである『学校的体験』を仕組みとして用意することで、より参加・参画の輪の拡大につながり、さらには参加者自身が様々な体験をすることで活動している住民同士が互いの理解を深めることにつながります。



.....
榎木元成
 小美玉市まるごと文化ホール計画
 策定プロジェクトチーム

これからの文化施設への想い

「文化」。若者にとってピンとくる言葉ではありません。自分の生活とは異質な何か特別なもののように感じます。思い浮かぶのは古墳や地元の行事といったところでしょう。私は、文化とは「その時代にいた人たちの活動」だと思っています。そしてふと思いました。「自分たちの生きた時代はどんな文化だったと言われるのかな。」

私は、未来の人たちに「小美玉市の文化施設は若者がたくさんいて、地域リーダーの輩出の場だった」と言われたいと思っています。県内のどこの活動団体のリーダーも活動の原点が小美玉の文化施設だったら、なんて誇らしいことでしょうか。

それを実現させるには何が必要なのか考えてみました。①どの世代の人も入りやすい“きっかけの場”②活動によって“成長できる場”③成長が個人の味になる“熟成の場”の3点です。特に大切だと思っているのが、若者が入りやすい“きっかけ”を作ることです。若者が集まることで施設は元気になり、元気なところには人が自然に集まるからです。

現在みの〜れではディベロップスクール(通称「DS」)という若者が企画の実行・運営をする若手リーダーを育成するチームがあります。そのDSに携わって感じたことがあります。それは若者が文化施設での活動にあまり興味を示さないということです。文化施設は真面目で特別な場所というイメージが強くて、若者が行く場所ではないと考えてしまっているのでしょう。過去の私もそうでした。しかし、DSの企画の参加者に感想を聞くと文化施設の特別な場所というイメージが変わったという意見をいただいています。参加してみれば意識が変わるんだなと実感しています。

これからの文化施設では若者を集めるために堅苦しくない“自由な環境づくり”が一つのキーワードになる気がしています。自由な環境が新しいアイデアを生みます。アイデアが生まれればチャレンジが生まれ、チャレンジが元気を生みます。いかに公的施設である文化施設で自由な環境が生み出せるのか。これは、文化施設そのものの可能性の追求・挑戦です。さまざまな決まりや壁があるとは思いますが、文化施設の可能性を最大限に発揮させるために何が必要なかをみんなで考えることが大事なのではないかと思います。

若者の視点で、こんな施設だといいな、こうすることが必要だなと考えたことを書かせていただきました。これからの文化施設をどう考えていくのか、何を重要視していくのかはこれからもいつも心の片隅に置きながらこれからも活動を続けていきたいと思えます。

◇実践モデル..アピオス小劇場チーム 住民プロデューサー養成講座

小川文化センター活性化委員会では委員を二手に分けて事業を実践しています。平成22年度にはその1つがアピオス小劇場チームとして活動していました。その活動期間である8ヶ月間を「住民プロデューサー養成講座」と位置付け、館職員が講師となつて連続講座を行い、プロデューサーとは何なのか、企画を公演に仕立て上げるまでの過程、企画を立てるポイントや予算組みの仕方、新聞記者をゲストに招いての取材シミュレーション、おやじバンドコンテストやアピオス小劇場の裏方参加など、現場実習を交えて学びました。最終的には全員が企画を立て、一人ひとりプレゼンテーションを行い、活性化委員全員による投票を行なつて次年度のアピオス小劇場企画を

決定しました。

活性化委員会は委員が2年任期で交替となり、地域コミュニティや行政区でコト起こしできる人を育てて地域へ戻す、人材育成を行う社会機関としての役割を果たしています。

今後は活性化委員会卒業生が引き継ぎアピオスの事業企画ができるよう住民プロデューサー集団を創設したり、現場実習で裏方に興味を持った人が継続して舞台上に携われるような組織を立ち上げるなど、様々な住民参加・参画の体制づくりに努めていく必要があります。また、他館においても様々な住民プロジェクトの現場で住民プロデューサーを育てることに着眼することで、異なるジャンルの個人やサークルをつなげる人たちが、あるいは地域と文化ホールをつなげる人たちが出てくるようになって、

元気を生み出すサイクルが生まれていきます。

◇実践モデル.. みの〜れ舞台表現ワークショップ

「みの〜れ舞台表現ワークショップ(以下、舞台表現WS)」と「みの〜れ住民劇団 演劇フアミリーMYU(以下、MYU)」の関係がこの実践モデルのひとつです。舞台表現WSは年度前半におおむね2〜3ヶ月の期間で開催され、館が主催して一般公募し、プロの演出家のもと一つの演劇作品づくりを行うものです。募集するのは役者体験希望の小学1年生から大人までで、経験の有無は問いません。いわば「演劇やコミュニケーションを学びながら、舞台づくりを知る学校」です。一方、MYUの役者もプロの指導を仰げるため参加を希望

し、MYUのスタッフは作品づくりを全面支援します。初めて参加する人は、①館が募集すること(安心感)②期間が限定されていること(入団するより遥かに敷居が低い)が参加の後押しとなり、MYUの役者やスタッフと一緒に舞台づくりを行う過程で仲間意識が芽生え、舞台表現WS終了後にはほぼMYUに入団します。MYUは、舞台表現WSをプロから学べるうえに新規団員を獲得できる機会(充電)と捉え、年度後半に自らのオリジナル作品づくり(放電)に生かしています。

住民主役・行政支援

2. 住民主役・行政支援

「文化パートナー」という考え方

「住民参加（行政主導）→住民参画（協働）→住民主役（行政支援）」という活動の成熟過程に伴う参加参画の仕組みの中で、住民参画からさらに進化した「住民主役（行政支援）」のあり方について触れていきます。

住民と行政（館）が共に時間と想いを共有しながら進めていく「住民参画」は、館職員が抱える仕事量の限界が活動量や活発化に歯止めをかけて

しまいます。そこで、文化ホールと価値観を共有し本計画を理解している住民スタッフや表現者が、自ら活動内容と館に求める支援について明示し、館や小美玉市の看板を背負って活動する「文化パートナー」になり、「住民主役（行政支援）」による事業推進を実現していきます。

ポイントは「三方よし」

この取り組みが活発に活動していくようになれば、館職員はますます新たな参加参画の輪の拡大に力を注ぐことが可能となり、人事異動してきた職員も新たな住民と共に成長することができます。一方で習熟した住民にとって、館職員の容量オーバーが住民参画活動の限界とされるよりも、自由にやりがいのある活動を行うことが可能となります。館職員は常にその活動内容を把握し精神的に寄り添いつつも、実際の拘束時間は減少します。

この取り組みは、小美玉3館をはじめとした文化圏のあらゆるところが活動のフィールドとなり、文化ホールの活動として地域活性化に一役買って出ることを考えているか、その企画が『三方よし（近江商人の経営理念「売り手よし・買い手よし・世間よし」）』となるかがポイントです。

住民主役（行政支援）の事業推進

自ら活動内容と館に求める支援を明示して、館や小美玉市の看板を背負って活動する「文化パー

トナー」が、3館とどのようにして手を結んで活動していくかを考えてみました。

◇試行イメージ◇

文化パートナーとの手の結び方

①文化パートナーになろうとする個人や団体が、自らの活動内容と館に求める支援を明記した企画書を用意します。

②年に一度、3館の自主事業企画委員（四季文化館企画実行委員、小川文化センター活性化委員会、コスモスプロジェクト）が一堂に会し、文化パートナー希望者からプロポーズを受けます。

③3館の委員は持ち帰って検討し、プロポーズの返事をします（逆に条件提示もあり）。

④次年度4月1日～3月31日までが活動期間となります。

◇実践モデル…みのり太鼓

平成4年に創設。東京・青山で開催された第1回創作和太鼓コンテストでグランプリに輝くなど、全国トップレベルの創作和太鼓集団です。みのりれが企画したリズムワークショップのノウハウをアレンジし、独自の和太鼓ワークショップを開発しました。



みのり太鼓とみのり〜れの連携により開催している「太鼓教室」。住民・みのり太鼓・館の三者にとつて三方よしの企画となっている。



小松崎由美子

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

思いは繋がる…のね。でも

生涯学習センターコスモスを活性化させる「コスモスプロジェクト」が立ち上がってから今年で3年目。中村補佐の「やっちゃいましょう！」という勢いある言葉に押され、昨年からの予算ゼロの中で企画を立ち上げました。不定期でいささか無計画。素人臭くはあるけれど、数回のイベントを実施し、客数は回を重ねるごとに増えていっているというのが今の現状です。

「思い」を「カタチ」にしたとき、独りでよがることなく、スタッフ同士が支えあい、来場して下さったお客様が「感動」を持ち帰ってくれる様子は、時間やガソリン代をかけながらも「言ってよかった。やってよかった」と、他には換え難い思いを得ることが出来ます。(これはみの〜れとアピオスという先輩がいたからできたことです！)

しかし、出産に例えるならば「やっちゃった(企画)」「産んじやった(実施)」…そのあと「どう育てたらいいの?(今後)」という壁にぶち当たってしまいました。(みの〜れとアピオスは上手に育てて成長しているのに…)

私は何処に行きたくて、こんなに走り回っているのだろうか？

そんな思いを漠然と抱き始めた頃、この座談会に参加することになりました。第1回目の「星の下」での座談会では、お互いがよく見えないというのが利点になり、顔色を伺うことなく、素直に自分のこの“迷い”を言葉にすることができました。その言葉をみなさんが温かく受け止めてくれてとても安心しました。第2回目の座談会では、「文化をビジネスとして活かしていく」という高田氏の言葉に衝撃を受けました。思っている、「清く正しい文化」の前では口に出せなかった言葉だからです。第3回目の熊倉氏の、限られた時間の中で、自分の文化に対する思いなどを惜しみなく語る勢いに圧倒され、開催中は言葉が出せませんでした。「無償であることの公平さ」「バトナムの“結束型”と“橋渡し型”」には深く共感しました。4回目のツリー構造化は、目先で走り回り、全体を考えていないと自己批判気味だった私が、実は「まち」を育てるために走り回っているのかも?という「繋がり」が見え、励みになりました。5回目の群馬交響楽団との座談会。戦後間もなくプロ化し、**社会活動**にも積極的に取り組んできたことを初めて知り、高崎市の子どもたちに嫉妬しました(笑)。

今なお「特別な領域の人たちのもの」と捉えられがちな“文化”は、あらゆる人間の“精神世界”という内側の土壌を耕す上で、とても大切なものだと思います。

文化は目には見えない。でも人間として欠かすことのできない文化が、こうしてもっともっと身近に感じられる「場」を増やし、文化を遠い存在としてしまっている方々に身近に感じてもらえるような、「橋渡し」ができれば、ここに今在る自分に自信が持てる気がします。

お母さんの活き活きた姿が何よりの子育て(大切な次世代へのバトン)
文化は案外、こんな部分から成り立っているのではないかと思っています。そんな私に「それでいいんだよ」って答案用紙をハナマルで返してもらえたような、そんな座談会でした。

必要な道具や講師はみのり太鼓がまかない、みの〜れは会場を提供するパートナーシップのもと、10年近く和太鼓ワークショップを開催し続けてきました。創作和太鼓のリズムを体験できるこのワークショップは、全国トップレベルの和太鼓奏者と一緒に和太鼓を体験できる取り組みとして参加者に喜ばれています。館としては地元の宝であるみのり太鼓と提携することでも和太鼓文化の普及ができます。みのり太鼓としてはワークショップの開催と成果発表会の開催により公演鑑賞者の拡大と新たな担い手の創出につなげる事ができるほか、ワークショップ参加費をみのり太鼓の活動費(太鼓の皮の張り替え、稽古場や移動トラックの維持費など)に充てることができます。

住民(ワークショップ参加者)、館そして

みのり太鼓の3者が三方よしの仕組みとなつています。

◇実践モデル◇

おみたまちンドンジャグバンド

みの〜れと商工会による一大祭り「四季の里さくらフェスティバル(現小美玉さくらフェスティバル)」のプロジェクトから生まれた、チンドン屋でもない、ただのバンドでもない、手作り楽器を加えた新たなジャンル「チンドンジャグスタイル」を確立。町村合併時には地域アクティビティの一環として行政区や地域コミュニティへ訪問。交流を深めて市の一体感の創出に大きく貢献しました。

昔なつかしいメロディを移動しながらどこでも演奏する機動力に魅力を感じた地域からはオファーが殺到しており、館としては行政区や地域コミュニティと

みの〜れの橋渡し役になり、信頼関係を構築してくれる存在としてかかせない存在になっていきます。バンド側は、みの〜れと手を組んで地域アクティビティを行うことで、みの〜れの看板を背負っている誇りを持ち、地域への認知度を上げる機会を得ています。地域の認知度があがることで新たなメンバーを確保出来るようになります。そして地域からのオファーをできるだけ受けられるようにして活動を充実させていくことがバンド側の希望です。



みの〜れで出逢った演劇人と音楽家が結成した「おみたまちンドンジャグバンド」。地域からの演奏依頼が多く、館と地域の橋渡し役となっている。

1. 次世代につなげる

みのの誕生前から活動してきた住民は現在もそれぞれのプロジェクトの中核として活躍していますが、エネルギーに満ちている今のうちから世代交代して新たなリーダーを立てていきたいと願っています。それは、自ら誇りとするこの活動を次世代に受け継いでいきたいからです。経験やノウハウは受け継がれていっても、想いまではなかなかうまく継いでいけないのが世の中の現実。すでに館職員は2代目に入れ替わっています。

どうやってバトンタッチしていくか、探りました。

ポスト青年団

全国各地に「住民参加」のホール運営を掲げる文化ホールはこれまでもありましたが、建前で終わってしまうケースも少なくありませんでした。なぜ、みののそれはそうならなかったのか。それにはこの地域が育んできた素養が大きく関わっています。

昭和40～50年代、この地域では18歳～23歳ぐらいの若者で組織された青年団活動が活発に行われ、最盛期には150人以上の団員が所属していました。行政側も青年団活動の社会的意義

を認め、まちづくりに関わる委員会などにも青年団団長を必ず入れていました。青年団の活動は、現在の「おみたまふるさとふれあいまつり」のベースとなる「カンナ祭り」を企画運営したり、朝5時に集まって国道6号にカンナを植栽し「フラワールード」の名で全国に名を轟かしたり、竹原中学校跡地の町有地が売却されるという話が出たときは跡地保全署名運動を起こして現在の希望ヶ丘公園として住民の憩いの場づくりをしたりなど、まちづくりに多大な影響を与えてきました。仲間たちと夜が明けるまで地域の課題や未来像について話し合い、そのために何ができるかを考え、行動に移していました。活動を通じて、「他者を理解しよう」とし、全体像を見据えながら物事を捉え、自らの意見を主張しつつもみんなが決めたことは守り通す。それが文化人」ということを学び、その中から、価値観の異なる人たちをまとめあげる手腕を持つリーダーを次々と輩出しました。リーダーたちに共通しているのは、「利他主義・プラス思考・あきらめない・指を自分に向ける（責任は常に



「みの～れデベロッパスクール」は、現リーダーの人格形成とスキル向上と次世代のリーダーの発掘・養成を視野に入れた塾。講演会やフィールドワーク、ワークショップを企画実践している。



近田由美

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

盛り上げ、引き継ぎ、見守る

私が50回まで所属していた「光と風のステージ」は、館長の熱い想いに応えるかのように、みの〜れをこよなく愛する仲間が集まり、立ち上がり、住民の創意と工夫をもってみの〜れの風の広場をライブハウスに変身させ、毎月1回土曜の夜に行われていました。

第1回を迎えるまでの間は、ドリンクカウンターやTシャツをデザインしたりメニューを考えたりと過ごし、平成17年7月に初回を迎えました。プロジェクトチームの約束として、アーティスト選定は雑誌や新聞などからはせず、ライブ現場を訪れ直接観たうえで他のメンバーにプレゼンすることとしました。「自分の目で観て企画する」ということで段々と自信もつき、そのうちにギャランティの交渉までできるようになりました。

みの〜れに更なる賑わいと活気を促すため、そして毎回楽しみに足を運んでくれるお客様のために試行錯誤しながらもプロジェクトチームは自然とその運営のポジションをそれぞれが担うようになっていました。美術装飾が得意な人。会議を引っ張ってくれる人。場の雰囲気明るくしてくれる人。何でも器用にこなす人。縁の下の力持ちに徹する人…。ドリンク付のステージが好評でこちらも回数を重ねるごとにライブの雰囲気に合わせてチョイスするようにもなりました。

のちに私は仕事で2年間レストランの立ち上げを経験するのですが、そこでの集客のためのイベントとしてインレストランライブを18回、展示を12回、小物作りのワークショップを17回行いました。このノウハウは光と風のステージやみの〜れのお陰だと思っています。平成22年3月に50回目を迎えた光と風のステージは、次の世代につなぐためプロジェクトチームは解散しましたが、その後も「光と風のステージCue」として新プロジェクトメンバーが結成されてがんばってくれています。

私たち旧プロジェクトメンバーは、知らない者同士からスタートしましたが、今では解散後も観劇したりライブを聴きに行ったりなど研鑽を重ね、また新たに「チーム アラカルト」という名で、今度はフリーで、みの〜れ・アピオス・コスモスなどで私たちの『らしさ』を發揮していこうとしています。そこには光と風のステージを経験し50回という大きな大きなベースがあります。自分としての至福の瞬間をまだ次世代に結果として渡せずにいますが、仮に渡せなくても、良い所を認め合いながらお互いに刺激しつつ10年後は若い人たちに引き継いでもらいたいと思っています。

小美玉市には文化ホールが3つもある、ではなく、3つしかない。3つ一体感で住民がいつまでも盛り上げ、引き継ぎ、見守っていければ最高です。

自分にある」ということ。青年団活動で磨かれ身につけたものです。現在、社会情勢や若者のライフスタイルの変化により、青年団は事実上活動休止の状態となっています。だからこそ、現代の若者の参加参加を得やすい文化芸術というジャンルにおいて、住民参加による事業運営を行うのです。仲間たちとの活動に燃え、「一から企画や組織を組み立ててやり遂げる」感動を味わうことで、将来のまちづくりリーダーに育っていきます。

を果たしていけると言えるのではないのでしょうか。

◆実践モデル：みの〜れテベロップスクール

みの〜れ誕生から5年後の平成19年度からスタート。住民プロジェクトは、リーダーの人格や考え方によってその成長や方向性が大きく左右されるため、伸び悩むプロジェクトも少なくありませんでした。

そこで、現リーダーの人格形成とスキル向上を目的に掲げ、さらには次世代のリーダー養成をも視野に入れた塾を創設しました。ドイツ・ノースランド出身のリーダー育成専門家やフアンシリテーションの専門家などを招聘して講義を開催するほか、地元の魅力探しのフィールドワークも実践しつつ、企画・立案・実行・体験を通して、地域リーダーを育てる環境をつくっています。

◆実践モデル：コスモスカフェ「win-win」

現在は、次世代リーダーの発掘と育成をメインに事業を展開していますが、今後は現リーダーのための人格形成とスキル向上のためのプログラムと交流の機会を充実させていきます。

子どもと離れて集中して講座に参加できる環境を整えるため、託児サービスを実施。参加する若い母親が自ら企画し、HIPHOPダンス体験、ヨガ体験、市給食センター見学会など、企画内容がバラエティに富んでいます。

◆実践モデル：コスモスカフェ「win-win」

今後は参加の輪を拡大し、若い母親が社会参加するための第一歩を踏み出す場として機能していきます。

中学・高校生との連携プログラム



地元の中央高校生30人が参加した「エコキャップ・アート」。10万個のキャップを色や形によって仕分けし、使用できる3万2千個を選んで、枠にはめ込んだ。放課後児童クラブでのワークショップにも参加した。

若者、特に10代の参加参画をさらに多くするための取り組みとして、中学生・高校生と文化ホールがつながるためのプログラムを展開していきます。

これまでも、そのためのチャンスはいくつかありました。それをきめ細やかにマネジメントしていくことで、「つなげる」目的に沿ったプログラムとしていきます。

◇実践モデル：小川南中・美野里中 2年生職場体験

企業が就職活動前の学生を対象として職場体験プログラムを行い、企業に親しみを持つてもらって優秀な学生を獲得することも目的に行なっている事例を参考にし、次のようなプログラムを実践していきます。

中学生は、職場体験を毎年夏休みに行います。これを積極誘致して、充実したプログラムを体験してもらうことで、文化ホールへの愛着を高め、真に理解してもらおうことにつなげていきます。

具体的には、住民の人たちにインタビューをして文化情報誌おみたマガジンの中学生版を作成したり、コンサートを作って実際に運営するなどの実践的なプログラムを行います。他にも、社会人として必要なコミュニケーションワーク

ショップや、文化ホールの魅力体験として照明機材を操ったり、バックステージツアーガイドになるための訓練を受けたりします。

計画づくりの過程で、小川南中学校と美野里中学校の2年生合計20名を職場体験として受け入れ、実施しました。

1日目：社会人として大切なこと

（ホスピタリティワークショップ）
舞台技術体験（舞台機構・ピンセット操作）
広報体験（ツイッター体験）

2日目：おみたマガジン号外製作体験
編集会議（レイアウト・取材内容検討）
インタビュー（住民委員）

3日目：おみたマガジン号外をつくって・発表して・飾ってみよう

号外製作／完成物の発表／陽だまり横丁（展示）

中学生が住民委員にインタビューすることで、住民委員が自らの活動を振り返って評価分析することにつながり、自己評価を高める効果が期待できます。



野手利江

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

文化の渦をまわす

【小美玉市の3館は】

合併して3館の文化ホールを持つ市となった今、1つの館でおきた文化の感動を他の2館に波及する。文化の渦をまわすのである。物質的には、キュートなデザインバスが駅・空港・3館をまわって人を繋いでいく。

【まちづくり】

どこの市も風景が同じになるような大型チェーン店の乱立がない小美玉市→美しい空を守りたい→子どもたちに感動を植えつけた教育をめざしたい

【個人の人生】

3館に関わることで1人1人の人生において登場人物がたくさん増える。どんな出逢いがあるか、どういう展開になるか面白いし、楽しい人生になっていく。人生はこれからだ！そんな気持ちにさせてくれる場所になりますように。

◇実践モデル：美野里中演劇部

活動支援

中学校に演劇部があつても、地域の演劇活動はありませんでした。みのの折には住民の専属劇団を創り、美野里中演劇部卒業生や地域住民の演劇活動の受け皿になることが将来構想に示されていました。そこで誕生したのが、みのの折こけら落とし住民ミュージカルを機に結成した演劇ファミリーMyuです。

具体的には、美野里中演劇部が立ち稽古に入った段階でみのの折に環境を整えています。

稽古場を移し、舞台技術管理マネージャーが演劇公演に必要となる舞台技術的な面からアドバイスと指導を行なったり、演劇ファミリーMyuの舞台道具を貸し出ししたりしています。

ここで裏方を経験した中学生が、後にStaff Egg(みのの折支援隊舞台技術部門)に入ったり、Myuで育った小学生が美野里中演劇部に入部するなど、関係を深めています。今後は、こうした支援活動をみのの折自主事業にしっかりと位置づけて、みのの折の活動の一つとして打ち出し、関係者の理解を深めていくことが大切です。

◇実践モデル：Jolly forest Jazz orchestra スチューデント・クリニク

みのの折住民楽団「Jolly forest Jazz オークストラ」が始めた、学生対象の楽器演奏クリニック。試験的に行なつた今回は、茨城ジャズ連盟との共催で、茨城県内の小学生から高校生ビッグバンドを対象として開催しました。

将来的には市内の小学生を対象として開催し、将来的にバンドメンバーに近づけていきたいという想いを持っています。

◇実践モデル：中央高校生のエキキャップ・アート参加

さくらフェスティバルは東日本大震災の影響で開催が中止となりましたが、実行委員で話し合った結果、小学生にも体験してもらおう機会を作るなど、さらに企画を発展させてイベントを完成させることにしました。エキキャップ・アートの作業は、10万個のキャップを色や形によつて仕分けし、使用できる3万2千個を選んで、枠にはめ込むというもの。これはみんながやったらもつと楽しいということに気がつき、地元の中央高校生も誘ってみることにしました。中央高校の先生の賛同を得てチラシを配布したところ、興味を持った約30人が参加してくれることになりました。

仕分け作業後は、各小学校の放課後児童クラブへ行つて1mの正方形のBIRDをエキキャップ・アートでつくるワークショップも展開し、そこにも中央高校生がサポート役で参加しました。

このケースは新規プロジェクトでしたが、すでに活動している住民プロジェクトに高校生が参加することで、既存の組織に新しい風を入れることにつながり、効果がありそうです。

このモデルケースからの学びは、高校生向けには「演劇作品の照明助手として仕込みとオペレーターを務める3日間コース」というように、具体的な内容と日程を決めて募集し、さらには世の中に発信できるプログラムにしていきたいです。モチベーションを上げると共に文化ホールの発信機能を体験することにもつながります。

館職員を育てる

直営+住民参画

ひと昔前には財団化、近年では指定管理者制度など、文化振興を第三機関に委託することが流行しましたが、最近では財団を解散して直営化する会館も出てきました。

直営の良いところは、文化ホール＝文化行政であることから、文化を活用したまちづくりで福祉や教育や農工商観光などあらゆる分野へ波及効果をもたらしやすくなること、住民参画型のホール運営により行政職員の意識改革と質の向上が図れることなどが挙げられます。

現在、アピオスとみのくれば市長部局、コスモスは教育委員会部局で、いずれも直営による住民参画型のホール運営を行っており、私たちはこの直営+住民参画による文化ホール運営が現時点ではベストであると捉えています。

但し、行政組織上の市長部局の生活文化課、教育委員会部局の生涯学習課の2課にまたがっていますので、住民にとって縦割りにならないよう、横断的な取り組みが必要です。公共ホール運営委員会、文化祭に関しては既に横断的な取り組みを行っており、今後のすり合わせも住民目線で行わ

れることを望みます。

現体制は、①職員のローテーションにより活力(新しい風)が生まれている
②新採職員がホールに配属され、磨かれてから各部署へ送り出される、という直営ならではのメリットが出ています。一方で絶えずイノベーションを求められる部署であり、マニュアルが通用しないクリエイティブな職務であることから、館職員の育成方法の体系化が必要です。

必要なスキル

「おもしろがる職員が増えていくと市は活性化していく。やりすぎちゃうぐらいの人がいてちょうどいい」と座談会の声。事なかれ主義の公務員気質は反感を買う時代です。文化ホール職員にはどんなことが求められているのでしょうか。スキルを挙げてみます。

- A. 本質を見抜く(理解する)力
- B. 将来を見据えながら今どうするかを考えられる力
- C. 固定観念に縛られない柔軟な思考
- D. 企画力(“三方よし”の実現)
- E. プレゼンテーション能力
- F. ファシリテーション能力
- G. ポジティブ・シンキング
- H. 愛郷心

研修プログラム

これらを育むための研修を体系化することが必要です。できるだけ外部講師に頼らず、職員が互いに講師になって研修を行えるような体系にしていくことで、教える側の成長も促していきます。

後進を育てることにより自分自身を振り返り、自らの目標を再認識することにも役立つだけでなく、プロジェクトをマネジメントする力、コミュニケーション能力を高めるための実践の場にもなります。

具体的な研修プログラムを挙げてみます。

◇新人(異動職員)研修

23年度実施例・講師 館職員

小美玉3館の文化行政が何を目指してやっているのか、その考え方を共有する研修。

- ・事前に「文化がみのくれ物語」熟読
- ・優秀な地域コーディネーターになろう
- ・文化ホール職員に求められるスキル
- ・文化ホールの歴史
- ・3館の改革・取り組みを学ぶ
- ・プロデュースと制作実務
- ・リーダーシップ・ワークショップ

文化ホール職員に求められるスキル

A 本質を見抜く(理解する)力	... 住民的発想 市民目線	E プレゼンテーション能力
B 将来を見据えながら今どうするかを考えられる力		F ファシリテーション能力
C 固定観念に縛られない柔軟な思考		G ポジティブ・シンキング
D 企画力(“三方よし”の実現)		H 愛郷心



.....
福島ヤヨヒ
 小美玉市まるごと文化ホール計画
 策定プロジェクトチーム

夢をかなえるステージ作り

「美野里町にホールを作ります。委員を募集します。意見を書いて応募して下さい」との呼び掛けに、夢中で意見を書き、委員になった。出来上がるまでの山あり谷ありの6年半と、出来上がっての3年半。美野里町の「みの〜れ」は実に生き生き輝いていた気がした。

その後現れた合併という嵐の中での、5年半。支える側の文化行政の当初は実に危ういものであった。しかし市民・住民の文化に対する思いは真に揺るぎないものであることが判った。積み重ねた努力、実績、足跡、そしてこれからへの期待、合併をばねに大きく膨らませようとしている。

奇しくも合併し、市内に3館を有するという恵まれすぎた環境に置かれてしまった小美玉市。故に悩み、模索し、今一つにつながることを夢見るまでになった。まずは交流すること、何度も何度も顔を合わせ、意見を闘わせ、ともに認めあうまでに進化を遂げた。今や3館にとどまらず、4館、5館を目指し、市内どこもがステージ、その中で何を創り、どう演じ、どのように繋げていくのか、議論が実現化を始めている。何よりそのプロセスが大切と思う。そして関わった人々がミッション、目標を持ち、絆を広げ、楽しく前進していることが実感できる。

さて課題は世代をつなぐこと。これも少しずつではあるが広がっている。あの時幼児だった子らが、思春期を迎え育っていく姿を見続けられたことも頼もしい。これから先の10年20年後がますます楽しくなっていくだろう。そんな時も山や谷、風がきつとあるだろう。私はその時も見守り役をぜひしたい。

しかし実際考えてみれば、いざ市内全域にこの思いを広めようというのは実に大それた大事(おおごと)。アメンバーのごとくじわじわ実行するのみ。それもまた楽しいかなあ。

合併してまだ5年。混ざり合うには当分の時を要するだろうが、今回のこのようなたわごとがきつと実現する時が来るはず。

私の眼の黒いうちに「あの時は」と語れる日を楽しみに、もう少し頑張ろうかねえ。

◇On-the-job training

業務上必要な技術や能力を、経験値が高い人が実際に見本を見せること
 によって伝えていき、試行錯誤を繰り返しながら自分の技術、能力として身につけていく訓練方法。

(例)

- ・フアンリテーション：参加意識を高める
- ・会議の作り方やワークショップ技法
- ・制作業務：ゼロから立ち上げ公演まで持つていく過程すべて
- ・グラフィックデザイン：デザインの基本から必要なソフトの技術
- ・プレゼンテーション：マスメディアの取材、視察や会議でのプレゼン
- ・企画力(三方よしの実現)：職員会議で常に企画を精査する

また、日常業務の中でも意識を変えることでスキルを磨けるチャンスがあります。

◇住民との対話

日常的に住民が足を運ぶ文化ホールの職場は、いま現場(まち)で起きている課題を住民がどのように捉えているかを把握してできる情報拠点です。

いろんな住民との対話(お茶飲み)を積極的に行うことで、①本質を見抜く(理解する)力②将来を見据えながら今どうするかを考えられる力が磨かれていきます。

◇館OB職員

改革を始めたばかりのアピオスとコスモスの館職員と、3館の住民リーダー

たちには創業者たる想いを残す人が健在ですが、みの〜れ館職員はオーブニングスタッフが全員異動したことに

より、すでに2代目にバトンタッチされています。2代目3代目に引き継がれるのはノウハウだけで、創業者の熱い想いは薄まっていくのが世の常。

いかに想いも継承されていくようにするのが問われ、活性化プロジェクトを始めたアピオス・コスモスもいずれ直面する課題です。

そこで、館OB職員の同窓会を定期的に企画します。館OB職員の愛着を逃さず、想いを受け継ぐためのプログラムです。3館の住民やアーティストも混じって行うことで、事業に携わった熱い想いや企画の根本的なものが受け継がれていきます。

また、館職員が人事異動する際には住民スタッフとしてボランティア登録を行い、その後の運営をサポートしていくような伝統にしていくことも大切です。

◇自己評価を高める

他の自治体の文化ホールなどと積極的に交流を図り、視察を積極的に受け入れ、教えることで自らのレベルアップを図っていきます。また、このことは他と違った強みを認識することにもつながります。自信がない中で活動しているとクオリティは上がりません。「これでいいんだ」と思えてこそクオリティを上げていく活動につながります。長所を確認できる環境づくりが大切です。

これからは、3館の活気、集う人材、強い愛着から生み出される企画実行力を、市内全体にどのように波及させ、まちの活性化を図っていくか、文化の力が期待されています。

小美玉全域を活動エリアとして文化活動を広げていくことにより、これまではずながつていなかった住民同士、地域と館、館と農工商観光施設などとあらゆるネットワークが構築されていきます。小美玉市内全域に広がっていくための考え方(マーケティング)と手法を挙げてみました。

1. アウトリーチ(※)

文化ホールの事業を展開していく上で、意識しているのが文化のサイクルです。鑑賞事業中心のときのマーケティングは、あくまでも年代とジャンルでの分け方でした。社会的機関として全住民にどうアプローチしていくかを考えたとき、文化ホールとの関わりが浅く遠いか、深く近いかで6つの層に分け、それぞれを①無関心層・文化芸術未経験層、②文化施設支持層(サイレント・パトロン)、③文化芸術関心層、④観客・聴衆層、⑤文化活動住民(文化団体・地元アーティストを含む)、⑥ボランティア(ポジティブ・パトロン)と呼びます。

このマーケティングで見れば、以前の

鑑賞事業のみの文化行政は③文化芸術関心層④観客・聴衆層にのみ焦点を当ててきたこととなります。これが、文化ホールは愛好家だけのもの、という誤解を生んできた原因です。

※アウトリーチ

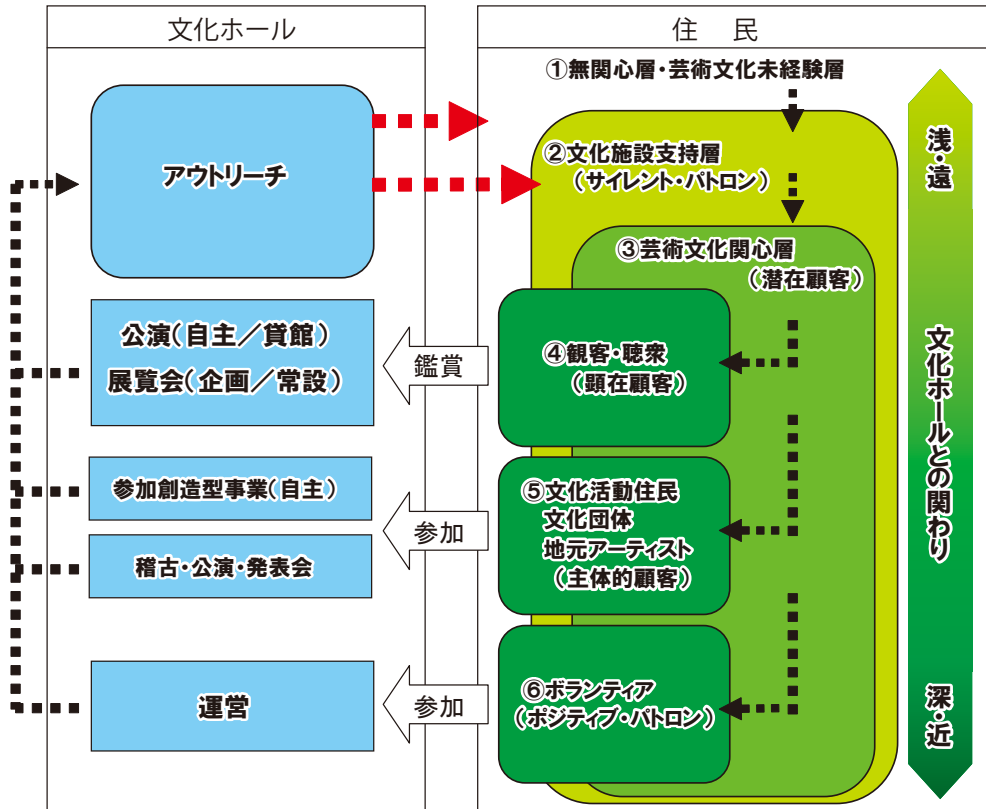
もともと「外に手を伸ばす」あるいは「(地域への)奉仕・援助・福祉活動」「(公的機関や奉仕団体の)出張サービス」という意味。所属劇団・楽団や提携アーティストを地域や学校に派遣し、ワークショップやミニコンサートを行うのが文化ホールのアウトリーチ活動。

アウトリーチの意義

近年、住民自身が舞台上に立つたり、ボランティアとして運営を支えたり、各種講座やワークショップに参加したりと、観客でも施設の借り手でもない、文化ホールと住民の新しい関係が生まれています。

他の事業は、文化ホール側としては住民が自らの意志で参加する「待ち」の姿勢であるのに対し、アウトリーチは文化ホール側の意志で対象を決めることができ、「攻め」の姿勢で取り組めることが最大の特徴です。普段文化ホールを利用しない人でも、その存在意義を認識してくれるように

文化ホールと住民の関係に新しい流れをつくり出すアウトリーチ活動





福田智彦

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

3館の取り組みと今後の課題

1. はじめに

今回のプロジェクトに参加をさせていただき、初めて文化について考える機会を得た。色々な分野のゲストの話やメンバーの意見を聞くことができ、貴重な経験となった。蓮見先生を始め、ゲスト、スタッフの皆さまに感謝したい。ここで得た情報や知識をどう消化して、これから自らの糧にしてゆくのかを考えている。レポートを作成するに当たり、3館のこれまでの取り組みを改めて検証し、課題や展望について考えてみた。

2. みの～れの取り組みと課題

10周年を迎える今も、その建設計画に始まる住民主導の姿勢は一貫し、設立当初の住民の熱い思いはまだ衰えず進化を続けている。地域創造大賞の受賞にみられる通り、その活動は、全国的にも高い評価を受けており、小美玉市文化創造の拠点となっている。住民主体の企画実行委員会が統括した企画運営を行いながら、みの～れ支援隊と各種実行委員会の住民スタッフが直接の支援活動を行い運営の基礎を支えている。また、演劇ファミリーMyuやジョリフォレなど演劇・音楽の住民サークルが育ち、数々のワークショップや芸術展、アクティビティーなどで、子どもから年配層まで幅広い年代の市民を対象にした身近に芸術・文化に接する企画を続けて、開館以来、地域に文化の種をまき続けている。

9年間の成果として市民への文化振興への貢献は、市民の多くが認めるところである。上記の企画・運営の組織体系についても盤石に思える。強い言えば、今後利用層のさらなる拡大ができるのか(公共ホールはどれだけ多くの住民に利用されるかが最重要)と職員や住民スタッフのモチベーションの維持と世代交代がうまく進むかが課題か。公演・イベントでは、いつもよく見た顔ばかりとなっているかも?(喫茶店のつづれるパターン)。

3. アピオスの取り組みと課題

かつては大型ホールを使った歌謡ショーや演劇などの興業型イベントが主体で、施設イメージ、運営方法は、みの～れのそれとはまったく対照的であった。合併後、みの～れからの職員移動を機に活性化委員会が立ち上がり、住民参加型のイベントが数々企画され成功を収めている。なりきり、おやじバンド、小劇場などの大型ホールを有する施設の特徴を生かした企画はいずれも盛況。また、アピオスばるるも発足し順調に活動をしている。閑散としたロビーや暗い受付カウンター、トイレなどが施設改修により明るいイメージとなり、展示スペースも設けられ、公演時だけでなく、人が集う空間に生まれ変わった。

みの～れでの住民参画の手法を生かした活性化の仕掛けは功を奏し、さらにホールの使いかたでは、みの～れの住み分けの道筋を立てた。しかし一方で、育成・住民参加型の企画が乏しく、特に一般市民(特に地元の旧小川町住民)に対して、文化の普及・振興の拠点となっているかは疑問(住民に利用され愛されるホールでなければならない)30周年イベントで、どれだけ多くの新・住民スタッフを発掘し、いかに引き込めるのかが間近な課題。

4. コスモスの取り組みと課題

図書館、史料館、公民館、ホールなども含めた小美玉市生涯学習の拠点となる複合施設で、他の2館とは市行政の所管も含めて異なる立場にある。かつて玉里村時代は、唯一の文化施設として、地域の文化・芸術の拠点として住民

なる可能性があり、アウトリーチは
①無関心層・文化芸術未経験層を
②文化施設支持層(サイレント・パトロン)に変化させる可能性を持っています。

◇実践モデル：地域アクティビティ

文化ホールが選抜したアーティストと共に1時間の授業をつくり上げ、小中学校の教室(1クラス単位)にそのアーティストを派遣して授業を行う「学校アクティビティ事業」は、小美玉市内全小中学校で行なわれています。1クラス単位というところがポイントで、息づかいを感じる距離で、キラキラ輝いている大人11アーティストが子どもたちと交流しています。

ティビティ。区やコミュニティのイベント企画担当の役員と館職員が話し合つて企画を創り込みます。一般論として文化ホールの敷居が高いという意見がありますが、こうしたやりとりが距離感を縮めます。
住民劇団・楽団や文化ホールと提携するアーティストが地域に向向いていくことにより、これまで「待っていただけでは対象になり得なかったあらゆる住民が事業の対象となり、文化ホールとの関わりを持つ住民の範囲を飛躍的に拡大していきます。

に愛され、その存在意義が明確であった。しかし、合併後、市内に3館のホールが存在するようになってからは、市の辺境に位置する立地条件もあつたか、市内他2館と比較するとやや活動が沈滞し、存在感が薄くなった感が否めない。数年前から活性化を目的とする、コスモスプロジェクトが立ち上がりC.C.C.(コスモス・キャンパス・コンサート)やコスモスカフェWin-Win、サークル交流会などのイベントが開催されて活気を見せ始めている。

これからのコスモス活性化のキーワードは「コスモス アイデンティティーの確立」と考える。かつてコスモスは玉里村文化・教育の中心であった。様々な分野の音楽・演劇が催され、多くの住民サークルが活動をし、子どもたちが育つていった歴史がある。これからの支えて行く人材はその中に多く存在するはずだ。ただ、玉里地区住民は、行政に対しての住民参画の意識が根差していないために、それを引き出しにくくなるような気がする。そこへのアプローチもコスモスプロジェクトの重要な役割か。また、アピオスがみの～れの手法を取り入れて成功したことに習うことも必要。閑散としたロビーを陽だまり横丁のような展示を目的とした活用をする。チラシだらけの受付周りを整理し、明るいイメージを作り出すことはできないのか?個人的には周辺環境と付帯施設を生かした企画(しみじみの家の宿泊)、特に小学生向けの自然体験を目的とした事業を展開し、コスモスになじみの薄い、美野里地区、小川地区の子どもたちを引き寄せる手段としたい。行政側の人事、予算面でのテコ入れを期待する。

5. 結び

小美玉市の3つのホールを「図らずも生まれた3兄弟」と蓮見先生は喩えた。子育てで重要なことは、兄弟と比較をしないことなのよとTVで尾木ママが言っていた。3館には3館それぞれの成り立ちと歴史がある。それを個性と言うならば、まずはそれぞれの個性を尊重しながら、最大限の愛情を持って育ててみよう。それぞれの長所を伸ばし、課題があれば兄弟の例に習う。兄弟は互いに切磋琢磨しながら、そして地域の人たちに支えられながら成長してゆく。

「3館の住み分け」は、今回のプロジェクトの一つの課題であった。それぞれの個性をほめて伸ばしてゆくことで違った顔つきになってくのではないかと。自ずと住み分けは出来るのかも知れない。



田村昇一

小美玉市小川文化センター(アピオス)

計画づくり通して生まれた信頼

計画策定に向けてのワークショップで思ったこと感じたことが3つあります。1つは、自らが積極的に参加するという意識をもつことにより、「やってみよう」と思う意欲が高まり、自分なりに考えようとする姿勢が身につくこと。

2つは、この体験(ワークショップ)は、講義などの伝達スタイルではないので聞いている立場の「お客さん」ではいられないこと、様々な意見交換をするには、知恵を出すため頭が動き、手振り身振りではないが体も動くこと、コミュニケーションにより「人と人」の関係(交流)の中から、和気あいあいとした、良い雰囲気が形成され自然と笑いも生じること。

3つは、グループという集団でルール(時間・役割)を守りながら、自分の考えやアイデアをできるだけたくさん出し、整理してまとめて発表することで、全体で(プロジェクトチーム)共有することができること。

気付いたことは、自らが参加・体験して共同で学びあったり創り出したスタイルとして、ワークショップは「参加」「体験」「グループ」で学習することに意義があるということです。

学習したワークショップの中で、印象に残る(特に頭を動かした)ことが3つあります。

1つは、理想が実現した未来の日記を書く「未来日記を書きましょう」。私は5つほど日記に書きました。グループの共通点として整理すると「みんなで文化を高める気持ちを持っているまち・文化活動によって、市民がまちへの愛情を深めている」という未来日記としました。

2つは、私たちが考える「魅力ある文化のまち」になるための10か条をつくらう。計画に記述したいと思うことなどを個々に書き出し条立てする。グループで立てた内容は、8つの条項としました。

3つは、計画書の柱と戦略を考えよう。これまでのワークショップ、先進事例の講義などで得られたキーワードを出し、計画書の構造にする。グループで出した構造は、文化ホールは「楽しむ・つながり・らしさ・慈しむ」を理念とし、目的は「人づくり」と「まちづくり」としました。

印象に残る3つですが、毎回行うワークショップが非常に刺激的であり、3館で活躍するプロジェクトチームのメンバーと、とても良い交流「人とのかわり」ができたと感じています。また、人それぞれ考え方が違う中で、ひとつのこと(答えを出す)を協力し合いながらやってきたこと(ワークショップ)で信頼感も生まれたと感じています。

文化の楽しさが実感できる事業を発信し、展開していくことが「魅力ある文化のまちづくり」につながると考えます。そのためには、自主事業活動をする中で、新たな事業を企画立案(各委員会)し、出来ることから1歩1歩「あきらめずに」進んでいくことが必要ではないでしょうか。

最後に、公共ホール3館を有することは、財政的負担が大きいですが、魅力的な文化のまちづくりができる条件が整っているという強みがある。まるごと文化ホールを中心とした活動により、まちの文化が守り育てられ、住んでいる人の心にまちへの愛情や誇りを高められると考えます。



前島京子

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

・・・やっぱりすごい！

昨年「チームまるごと」に参加しております。毎回、今度は中本主幹は何をさせるの？とドキドキし、胃が痛くなることも少なくなく、緊張ばかりしておりました。

正直な話、自分の知識不足を感じながら・・・そんな私が、小美玉市の将来の文化ホールのあり方なんてどうすんのよ！わかんないよ！と、心で思いつつの参加です。なんか意味もなく否定的になることもありました。

成功者の体験談・・・私たちにいろんなことを投げかけたり、計画作りのためのキーワード探し、それはそれなりにわかるけど・・・それだからどうなの？今、成功しているから言えるんだよね。そんなふうに見える自分がその場にはいけないかも。葛藤の時間もあり。

でも、集まった皆さんの考え方、文化ホールへの思い・・・心に伝わりました。皆さん、疲れていても(私も疲れていました)、夜、集まり、時間を忘れディスカッションをしている、こんな人たちがいるからこそ、小美玉市の文化は活性化してきたんだなあ！とつくづく思いました。

たくさんのキーワード探し、手段、戦略、理念を考えながら、やはり、いつも思うことは「人づくり」。将来の文化ホール計画に必要なものは、なんだかんだいっても、将来を担うための「人づくり」が、一番大事だと私は思います。

今、元気に頑張っている方たちのような方を、たくさん育てていく「人づくり」これが必要だと思います。

小美玉市には、「チームまるごと」以外にも、3館に関わって頑張っているたくさんの人たちがいます。もっともっとたくさんの仲間が集まってくると確信します。

そのためには・・・今のうちに中本さん!! はじめ、3館の職員の皆さん！仕掛けていって下さい。いろんなことを仕掛けてきた、皆さんならそれが出来るはず。

最後の最後に「レポート」提出があるなんて・・・やっぱり、すごい！今の私には、いろんなことがありすぎて、すみません。こんなことしか書けません。

未来予想図

小美玉市の新たな文化づくり物語

2021年(平成33年)。来年はみのゝれが20歳を、アピオスが40歳を迎えようとしています。コスモスはこの前の7月で28歳になりました。3館がきょうだいになって15年の月日が流れました。きょうだいの結びつきはますます強くなったように思います。

相変わらず3館にはいろんな人たちが毎日にやってきます。地域の人たちばかりでなく、市外からもその魅力に惹かれて通ってくる人がいます。中には移り住んだ人もいます。

ホールに向かうのは歌の練習でやってきたコーラスのお母さんたち。ホワイエでは文化情報誌おみたマガジンの取材をしている隣で、農業関係者の跡継ぎの若い人たちがミーティングをしています。窓の外には霞ヶ浦の景色を見つめながら愛を育むカップルの姿も。ダンボールで芝生をすべって遊ぶ子どもたちを見つめながらお茶を飲んでいる若いお母さんと育児。ババ。みんな館のスタッフとも顔なじみで「やあ」「どうも」「ひさしぶり」いつもの手を挙げてのあいさつ。

今日は朝からなんだか賑やか。ホールの予約にやってきた人たちです。本当ならくじ引きで決めるところですが、

予約したい2日間をうまくやりくりして分け合う方法を話し合っただけで着いたようです。話し合い、互いにハッピーになる方法を考えるのが小美玉の人たちの特長です。

すっかり顔なじみの地域コミュニティのおじさんと館職員、ボランティアの人たちがいるような道具を担ぎ、車に乗せています。今から地域アクティビティに行くところのようです。今日のアーティストは、おやこDEジャズに出演しているピアニストと俳優4人組。いまやホール企画制作公演はアウトリーチに行くことが前提で創られていますから、舞台美術も仕込みとバラシが手間いらずに工夫されています。

館内には制服を着た中学生の姿もあります。中学生の職場体験です。彼らは3日間の中でコンサートを企画してチラシを配り、本番まで運営するのです。これが小美玉名物「中学生プロデュースコンサート」。小美玉の子たちはこの職場体験を通して「プロデューサー」「演出家」「照明プランナー」とオレクター「舞台監督」「フロントスタッフ」など、コンサート

の企画運営に欠かせないポジションを体験でき、それが現実のコンサートとして本番が行なわれます。このときの体験を機に文化ホールスタッフになることを夢見て、今年から文化ホールに配属になった女性があります。新規採用職員が文化ホールに配属されるのは小美玉市役所の特長です。文化ホールで住民参画プロジェクトを通じて磨かれた職員は、固定観念に縛られず柔軟な思考で仕事を進め、人間関係を構築するコミュニケーションに長けていて、みんなクリエイティブだと評判です。これは文化ホール職員のための充実したトレーニング・カリキュラムと、住民と新たな価値を生み出すプロジェクトを次々と仕掛けて行く現場に恵まれているおかげですね。

文化ホール職員は、新規採用職員や5年ぐらい経験を積んだ人のほかに、各館1人ずつ10年以上の経験を持つスペシャリストがいて、アートマネージャーとして活躍しています。創意工夫が地域活性化の鍵を握る文化行政の中でも、小美玉市は特に成功例の少ない住民参画型のホール運営を特長として打ち出しているため、職員が一人前に育つまでに10年かかります。住民と館職員が共創の関係を築くには、経験と想いを蓄積

した専門性を保ちつつ新しい風を入れていくというバランスが大切ですが。

さらに、スタッフのやる気を引き出して常に住民目線で決断し、住民の力が最大限発揮できる環境づくりに奔走する館長、専門的見地で3館の活動の社会的意義を理論的に整理する文化芸術の専門家、さらには文化ホールが持つ専門性を生かして舞台技術の側面から文化のまちづくりを支える舞台技術管理マネージャーの三者は、文化ホールの元気づくりのためになくてはならない人たちです。この三者が民間登用されていることで、文化ホール職員に民間的発想と住民目線で物事を捉える力が蓄積されています。

日が暮れて、ホールに出入りする住民の顔ぶれが変わってきました。ジャージ姿の子どもたちは演劇の稽古。楽器や太鼓を担いでいる若者の姿もあります。バッグ片手にやってきた人たちは会議でしょうか。毎晩のようにいろんな会議が行われていますからね。

3館の住民参画は今も健在ですが、若干の変化が見られます。会議を仕切っているのは若い人たちです。かつてのリーダーたちの姿も見えませんが、若い人たちの活躍に目を細め



中村 哲也
小美玉市生涯学習センター(コスモス)

文化ホールの主役は市民

「また10時になってしまった。」その後も話したりしないのか、立ち話が続く。毎回の会議がいつもこのような感じで終わっていた。時間がいくらあっても足りないくらい。

計画策定に係わった人たちに文化やホールについての話をしてもらおうと、きっと話がつきないほどの想いがあったり、活動的であったりというのが感じる事ができる。文化ホールに携わっている人たちは、自分で自分のやりたいことをしているだけでなく、いやそれ以上に文化ホールを盛り上げようとする、ものすごいパワーが目当たりにすることができた。

毎回の会議の中で、他の文化ホールや文化活動の話や、多彩なゲストによるお話などを聴いた中で、自分の活動はあまりにも小さく、参考とすることまでもいっていないような感じがした。

私の中で文化芸術と聞くと、どうも敷居が高いようなイメージがあったが、文化ホールでの仕事に携わるようになり、活動をしている人たちと触れ合うようになり、そのイメージが払拭された。

確かに芸術性の高い本物を観ることも大切であるが、市内の身近な文化ホールは市民のためのものであり、市民の活動の拠点として、すでに多くの市民が活動していることをあらためて認識することができた。

文化ホール3館、茨城空港も賑わいを見せている。それにも増して、空の駅にはステージも出来る予定で、市内でお客様の取り合いになってしまうのではとの心配も出てきたが、文化活動だけを取ってみても、多種多様、趣味趣向も違うので、それほど心配することもないのではとの感もでてきた。

文化ホールをどのように維持していくかで見えてきたものは、これからも文化ホールを担っていくのは、市民であるということ。そして市民との協同であり、共同である。それを続けていくことができれば、文化ホールの衰退はない。世代が変わればやることも変わり、マンネリもない。古くから携わっている人はその変遷を暖かく見守っていくことも大切である。文化ホールはみんなのものという意識で、遠い存在ではなく、足の運びやすい気軽なものであってほしい。

みなさんの心の中で、少しでも文化ホールを見てみたいという心が芽生えたら、一度来てみませんか。あなたの想うことは何もないかもしれませんが。もしかすると想像以上かもしれません。新しい自分を見つけることができるかもしれません。(ちよつと大げさかも)でも人生が変わることってあるかもよ。

この策定委員会に参加して私の好きな言葉を思い出しました。高校生時代に出会った言葉で、それは「私は誰にもできない人生を演じたい。」

ながら、意見を求められるといろんな視点からの考え方を示し、あくまでも若い人たちに決定を任せるスタンスを変えません。若い人たちはそんな彼らを慕い、なかなか引退させません。重宝されて、かつてのリーダーたちもなんだか誇らしげです。

今夜は文化ホール職員OBと住民、アーティストを交えた同窓会です。毎年行なわれていて、昔話に花が咲きます。井戸を掘り始めた人たちの苦労話は長くて、いつも時間オーバーになつてしまっていますので、コスモスの隣のしみじみの家に宿泊前提で行うことになったそうです。OBやアーティストや住民の人たちの熱い想いが、こうして今のスタッフに受け継がれています。

小美玉市の文化は、10年前に3館のリーダーたちが集まって作り出した「小美玉市まるごと文化ホール計画」に記された「ポジティブ・フィードバック」の方針に則り、3館に共通する想いを踏まえたいうで、それぞれの長所を伸ばしていく手法で個性あふれる文化ホールになりました。さらに、街中まるごと表現活動のフィールドとして活用しています。

さて、明日は「第II期小美玉市まるごと文化ホール計画」の座談会です。テーマは、「リーダーなきリーダーシップ」老舗と伝統を学ぶ。私たちのまちの文化を伝統として受け継いでいくための大切な座談会です。3館のリーダー

が集まったの研修や会議は毎年恒例になっていて、「お互いの良さを認め合いつつ、でも負けない！」と思っています。今年も10年後の未来をつくる特別な会議。しっかりとこだわって、そしてできるだけたくさんの人に参加参加してもらおうための計画づくりにしたいと思います。





林 美佐

小美玉市小川文化センター(アピオス)

文化の力でまちを元気に

「小美玉市まるごと文化ホールの座談会」で常と感じたのは、みんな自分の住むまちに愛着があって、そのまちが元気になることへの想いがあふれていることです。

文化は生活には直接必要無いのかもしれませんが、文化の持つ力でたくさんの人たちの心をつなぎ、心が豊かになって、まちづくりにつながっていくことによって、自分の住むまちに活気が生まれ、愛着が湧き、親から子へと受け継がれていく手段には必要不可欠です。

これまで小川文化センターアピオスでは、東京から一流の方を呼んで、住民への鑑賞の機会を提供してきましたが、平成20年度の国民文化祭をきっかけとして、住民参画を取り入れて改革をしてきました。

「小美玉発！スター☆なりきり歌謡ショー」もその1つで、ステージに立って歌うのは一般の方で、あとはプロがバックアップして本格的なステージをつくる企画です。自分を応援する観客を30人連れて来るのが参加条件の1つになっており、応援合戦も見ものですが、一般の方が出演する公演にもかかわらず、チケットが完売してしまうほどの人気です。

また、「この企画を通してここに住む人たちをつなげたい。このショーと一緒につくっていく」という主旨をご理解いただいた地元の企業・団体に協賛をいただいております。

この企画によって、アピオスに来たことの無い方が、自分の知り合いを応援するのに訪れ、また公演を観た人の中には、次は私もこのステージに出ようと思ひ、また応援する人たちを連れて来る。そして協賛企業・団体を紹介することによって、地元の企業・団体を理解することにもつながっていく。

今回の座談会で、蓮見先生が言われた“きれいな水の中では、限られた生物しか住めない。”“超一流を目指すなら、超一流を連れてくれば良い。”“「小美玉らしさ」＝真似の出来ない多様性のある、そしてクオリティーの高いものを目指して、3館それぞれの個性を出していかなければならない”と言われたのが印象に残り、まさにこういうことなのかなと思いました。

また、生活文化課では、芸術文化にふれたことのない子どもたちに、芸術文化に触れる機会を与えていく「学校アクティビティ事業」を現在行っておりますが、今回の座談会で、群馬交響楽団の戦後からの活動の歴史の話をお聞きして、結果が出るまで時間はかかりますが、「学校アクティビティ事業」が次の世代を育て、良い人材が育てば豊かな地域(まち)へとつながっていく、そんな仕事をしているのだと実感し、改めて自分たちがやっていることが、必要なものなのだと再認識しました。

地方は都会とは違って、地に根をはって花を咲かせることが大切で、地にしっかりと根をはるまでは時間がかかりますが、しっかりと根をはれば強くなれる。小美玉市にもしっかりと芸術文化の根がはれるようにしていかなければならないと感じました。

我々職員が、そういったことを理解した上で事業を進め、またそれを少しでも多くの住民の方々に知っていただきつなげていく、そして小美玉市が元気なまちになるようにこれからも努力していきたいです。



長谷川正幸

小美玉市四季文化館(みの〜れ)

文化ホールは人づくりの場

今回、蓮見先生を中心に、プロジェクトメンバーの皆さんとともに「まるごと文化ホール計画」を作成していくという貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

蓮見先生の講義を聞いたり、時には講師の先生を招いて経験談や事例のお話を伺ったり、メンバーの皆さんとワークショップ等をやりながら計画作りをしてきましたが、自分としては毎日が新鮮で大変勉強になりました。

平成18年に旧小川町・旧美野里町・旧玉里村が合併して小美玉市が誕生し、6年目になります。合併当初は、旧町村の行政サービスの違いなどもあり住民の方々も、負の意識が強かったように感じます。それまでの歴史や環境などの違いもあり仕方がないことなのかも知れません。しかし、時間とともにお互いを知ることにより、だんだんと前向きに考える人が増えてきたように思います。

市内には3箇所の文化ホールがあり、建設された経緯も違い、そこに関わる人たちの考え方や思いも当然違います。私は、昨年の4月から四季文化館(みの〜れ)に配属になりました。住民主導で建設され、運営されていることは聞いていましたが内容的なところはあまり知りませんでした。みの〜れに行って、子供たちからお年寄りまで年齢に関わらず人の出入りが多いことと、みんながすごく元気で、誰に対しても自然に笑顔であいさつしていることに驚かされました。自分の子供の頃は、それが当たり前で、いまは地域のコミュニティが少なくなってきたように思います。

今回、いろいろな方のお話を聞いて、「住民主役・行政支援」という文化が、地域の活性化、理想的なまちづくりにつながっていくと改めて感じました。

「まちづくり」には、まずそこに住む人づくりをすることが大事であり、人づくりのための一つの手段とし文化ホールが活用されることが望ましいと思います。

そのために少しでも役に立てればと思っています。



中本正樹

小美玉市小川文化センター(アピオス)

生まれ育ったこの地に誇りを

私の父は、兄と私をプロ野球選手にするのが1番の夢でした。2番目の夢は、自分の夢だった小学校の先生。この夢は兄が叶えました。

私たち兄弟が少年野球チーム「江戸スワローズ」に所属していた頃、父は監督を務めていました。その父を中心に、コーチ・保護者で作ったソフトボールチームが「W(ダブル)オーバース」。みんなお腹が出ていて、「ウェイトオーバーのおじさんたちの集まりだったから」というのがチーム名の由来です。

あれからかれこれ25年は経ちますが、当時の少年野球の仲間たちが父たちのチームに入り、2世代で活動しています。少年野球で鍛えられた仲間が揃い、学生時代にソフトボールのピッチャーを経験してきている仲間もいて、なかなか強いチームなのです。教え子たちが活躍してWオーバースを強くするのが父の3番目の夢でした。父が満足そうですから、叶えられているのでしょう。

2世代揃って、という話。次男坊の私が地元に残ろうと思った最も大きな理由は、このWオーバースの存在だったのです。地元で自分の居場所がある。仲間たちが揃っていて、それを望む親たちがいる。

文化も同じだと思うのです。みの〜れを誕生させようとした住民の人たちは、「みの〜れは子どもたちの文化活動の受け皿になってほしい」という想いを持っていました。美野里中の文化部(団体)は演劇部と吹奏楽部。ここのOBたちは、水戸や土浦・つくばまで行かないと活動の受け皿がないことから、ほとんどが活動を辞めてしまっていました。こんな背景から、住民劇団・住民楽団はみの〜れ誕生と同時に課せられた使命でした。

大人になっても自分が本気になって活動できる場所があるということは、手塩にかけてまちぐるみで誇りを持って育ててきた子どもたちがこの地に住みつく理由の一つになるのでは、と、私の実体験から強く思うのです。

文化ホールは人が成長する場であり、人が想いを寄せる場でもあり、生まれ育った土地に誇りを持つことにつながる。そして手塩にかけて育てた子たちがこの地を支えて、日本を支えていく。そんな素敵なサイクルが、とって実感できている今日この頃。この仕事に携われていることに、あらためて感謝しています。



関 秀樹

小美玉市生涯学習センター(コスモス)

3つの宝箱

合併し、3つの文化施設をもつ小美玉市。この文化施設をまちづくり・人づくり・交流の道具として、いかに有効に活用していくかは大きなテーマです。

3つの施設にはそれぞれの顔があります。

1,200席のキャパシティがあり、多人数の催しが開催できる小川文化センターアピオス。住民組織が活発に活動し、事業の企画決定や実施に積極的に関わっている四季文化館(みの〜れ)。図書館・公民館・史料館・ホールの複合施設で、市内の公民館(類似施設を含む)を統括し生涯学習の拠点となっている生涯学習センターコスモス。

これらの施設は確かに箱ですが、市民や地域の皆さんが愛着を感じ誇りに思える施設になれば、心のよりどころ・小美玉市のシンボルになります。

ここに人が集い交流することで、生きがいや喜びが生まれ、明日を頑張るモチベーションとなり、まちが明るく元気になります。

この箱の使い方によっては、ただの箱のままでもあり、あるいは魔法の宝箱にも変わります。

ただの箱をどうやって魔法の宝箱に変えていくのか。それには、ここに関わる住民の皆さんや職員の、様々なアイデアや仕掛けが必要不可欠です。

どうしても目先の事業を“どうやって無事に開催するか”ということだけを考えがちですが、“この事業をどのようにしてまちづくりにつなげていくか・どんな楽しい仕掛けを作ろうか”という意識で考えていけば、私たちの手で魔法の宝箱に変えることができます。

多くの人達がそれぞれの目的で宝箱に集まり、楽しみ交流し沢山の出会いが生まれれば施設もまちも元気になります。

小美玉市のあちこちで身近に芸術文化に触れることができ、10年後も20年後も、3つの宝箱(文化施設)がまちづくりの拠点として輝き続け、明るく元気な笑顔で満ち溢れていたなら、この「小美玉市まるごと文化ホール」プロジェクトは大成功だと思います。

これからも、何らかのかたちでこの“魔法の宝箱”にかかわっていきたいと思います。



清水弘司

小美玉市四季文化館(みの〜れ)

物語に溢れるまちに

これまでの、小美玉市まるごと文化ホール計画で行なった様々なディスカッション・シンポジウム・座談会で再発見したことがいくつもある。

それはプロジェクトメンバーそれぞれが自分の関わっている事業や取り組みがどんなに素晴らしいことかという自信を持っている、そして、さらに良くするためには何がいいのか悩んでいる。

それはまるで館長のように考えている。

プロジェクトメンバーそれぞれが、自分の基盤とする「ホール」の現状を変えるには、より活性化するにはということを感じているのだと感じた。

「ホール＝人」

それは、3館に関わる人それぞれが、ホールということ。

つまり、小美玉市に3館あるのはホールではなく、3館それぞれに関わる特色のある「人材」という捉え方をすること。

その3館にある人材が交流する。

みの〜れで始まった「物語」の第2章がコスモスでスタートする。

その物語を見た人がアピオスで「物語」をスタートする

それは、住民が一人の作家のように

「物語」を書き終えた作家は、他の作家の「物語」を読む「読み手」であり、自分の「物語」を伝える「伝え手」になっていく。

そんな「物語」を発行する行政

それは、出版社のように

作家である住民にネタをという「交流」する場を作り、「物語」を製本するため「社会的役割」という校正をする。

けれど、あくまで「出版社」

でも、お金という「社会資本」が欲しい「出版社」

だからこそ、「裏方」

だからこそ、「支援」

そんな物語を増やしていくこと

そんな物語を多く出版していくこと

10年後、20年後そんな「物語」で溢れている小美玉市であって欲しい。



沼田譲治

小美玉市四季文化館(みの〜れ)

熱意×想＝人の心を動かす

このプロジェクトチームの会議を通して、プロジェクトチームメンバーやゲストの話聞き、共通している部分を自分なりに考えてみました。

「この地域を良くしたい」「このイベントを成功させたい」という【熱意と想い】です。

【熱意と想い】を持っている人の話は、聞き手の心を揺り動かします。そして熱意と想いを波及させます。それが「ビッグウェーブ」になって、地域を輝かせたり、イベントを成功に導いたりするのだと感じました。

四季文化館(みの〜れ)には、多くの住民が参画しています。なぜこんなに多くの住民が、みの〜れに足しげく来ていただけるか？それは館長や職員に【熱意と想い】があり、「館長(職員)の為だったら一肌脱いでやろう」と感じているからだと思います。逆に「住民が頑張っているんだったら、給料をもらっている職員はもっと頑張らないといけない」と必然的な発想が出てきませんか？その住民と職員の信頼関係で、みの〜れは様々な山あり谷ありを乗り越えられたのだと考えます。

今よりも「ちょっと」気遣いをしてみてください。

今よりも「ちょっと」丁寧な対応をしてみてください。

今よりも「ちょっと」様々なことに興味を抱いてみてください。

今よりも「ちょっと」が良いです。その「ちょっと」の積み重ねをすることによって、【熱意と想い】に変わり、【人の心を動かす】、10年後の小美玉市が今よりさらに輝いていることを祈念します。

小美玉市まるごと文化ホール計画策定プロジェクトチーム 2年間の取り組み

1 年 目	11月18日(木)19:30-22:00	アピオス 会議室1	講義:石川県 金沢市民芸術村の取り組み(講師:蓮見孝 筑波大学大学院教授) ワークショップ:想像から創造へ①脳みそを揺さぶる～時間軸を動かす～
	11月25日(木)19:30-22:00	みの～れ 練習室1	講義:富山県 利賀村の取り組み(講師:蓮見孝 筑波大学大学院教授) ワークショップ:想像から創造へ②脳みそを揺さぶる～視点を変える～
	12月2日(木)19:30-22:00	コスモス 集会室	講義:青森県 八戸美術館の取り組み(講師:蓮見孝 筑波大学大学院教授) ワークショップ:想像から創造へ③脳みそを揺さぶる～発見を引き出す～
	1月16日(日)13:30-16:00	みの～れ 風のホール	シンポジウム「文化をまちづくりにどう活かす？」 1. 基調講演 薄 崇雄 福島県喜多方市喜多方プラザ 元館長 喜多方発21世紀シアター「街ん中で大文化祭!笑顔とにぎわいのアート・フェスティバル」 2. パネルディスカッション ～文化をまちづくりにどう活かす?～ コーディネーター 蓮 見 孝 筑波大学大学院教授 パネラー 羽 原 康 恵 取手アートプロジェクト事務局長 黒 田 惇 彦 小美玉市公共ホール運営委員会委員長 前 島 京 子 アピオスばるず会長 小松崎由美子 コスモスプロジェクトメンバー
	2月17日(木)19:30-22:00	アピオス 会議室1	講義:シンポジウムの総括(講師:蓮見孝先生) ワークショップ:「魅力ある文化のまち」になるための十か条をつくらう
2 年 目	7月7日(木)19:30-22:00	みの～れ 風の広場	星を見ながら文化談義「全国の文化ホールの実態と小美玉市の文化芸術活動」 ゲスト:武田順 茨城県生活文化課係長 座長:蓮見孝 筑波大学大学院教授
	7月21日(木)19:30-22:00	アピオス 会議室1	座談会「空港を活かした商工観光活性化と文化芸術の連携」 ゲスト:高田勝利 小美玉市空港対策課 主幹 座長:蓮見孝 筑波大学大学院教授
	7月28日(木)19:30-22:00	みの～れ 練習室1	座談会「持続する文化のまちづくり～文化を発信し仕掛けていく人材をどう生み出していくか～」 ゲスト:熊倉純子 東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科教授 座長:蓮見孝 筑波大学大学院教授
	8月4日(木)19:30-22:00	アピオス 会議室1	ワークショップ「ツリー構造化:ビジョン・戦略・手法を考える」 講師:蓮見孝 筑波大学大学院教授
	8月19日(金)19:30-22:00	アピオス 会議室1	座談会「市民の寄付を募った全国初の音楽センター」 ゲスト:五十嵐靖男 財団法人群馬交響楽団常務理事 栗 田 弘 之 財団法人群馬交響楽団事業課長 座長:蓮見孝 筑波大学大学院教授
	9月8日(木)19:30-22:00	コスモス 集会室	計画書のまとめ&プロジェクト総括 座長:蓮見孝 筑波大学大学院教授

アピオス・みの～れ・コスモス 各プロジェクト組織への「腑に落ちる仕掛け」座談会

9月7日(水)16:00- 文化教育検討委員会:幼・保(17名)	9月27日(火)19:30- 小川文化センター活性化委員会(12名)
9月14日(水)16:00- 文化教育検討委員会:中学校(4名)	10月5日(水)19:30- みの～れ支援隊 公演スタッフ(4名:代表者会議)
9月14日(水)19:30- コスモスプロジェクト(14名)	10月5日(水)19:30- アピオスばるず役員会(11名)
9月16日(金)19:30- みの～れ支援隊 みのんば編集局(9名)	10月7日(金)19:30- みの～れ支援隊 スタッフ調整会議(4名)
9月19日(月)19:30- ときめき美の小径(10名)	10月9日(日)19:30- みの～れ支援隊 Staff Egg(7名)
9月20日(火)19:30- みの～れ住民楽団 Jolly forest Jazz orchestra(12名)	10月14日(金)19:30- 光と風のステージCue(10名)
9月21日(水)16:00- 文化教育検討委員会:小学校(12名)	10月17日(月)19:30- なつかしの名画座企画実行委員会(8名)
9月26日(月)16:00- 四季文化館企画実行委員会(10名)	11月13日(日)19:00- みの～れ住民劇団 演劇ファミリーMyu(22名)

